

<論 文（科学方法論、科学技術政策分析）>

科学技術と人文学の方法論的交流 — 「昭和の鷗外」における医学と人文学の連関 —

江 藤 肇

要旨

科学技術者の倫理という問題の他、計算機情報学の発展は、科学技術と人文学の交流を必要としており、2005年にはロボット研究における人文科学との交流を呼びかける会が文部科学省科学技術政策研究所の主催で開かれている。しかし科学技術者や行政官は、医学と並んで最も古い伝統を持つ人文学の本質について考察することなく、便利屋として人文学の細切れ知識の動員を企図している嫌いがある。人文学は古いが故に非科学技術的と無視される反面、同じ理由で魅力を感じ、少数とはいえ人文学の研究に励んだ科学技術者や行政官もいる。「昭和の鷗外」と呼ばれた皮膚科学者太田正雄東大教授（詩人木下柰太郎）における医学研究、宗教史、美術史研究に共通する方法論や価値観を事例として、人文学と科学技術（彼の場合は医学）との方法論的関連について考察する。

キーワード

学際研究、皮膚科学、母斑、細菌学、詩、キリシタン史、史実主義、印象派、木下柰太郎、太田正雄、森鷗外、坂口安吾

1 はじめに

技術は経済学経営学と若干の交流があり、科学もビッグサイエンスの時代に入って行政学や経済学と極めて僅かながら関連が出てきた。しかし科学技術と

人文学とは逆に以前にはあった科学技術史、科学哲学、技術哲学を媒介とする交流が、最近の実際的な問題の陰に隠れる傾向が強い。同様に、科学技術者が趣味として持っていた人文学への関心の伝統が、最近の社会風潮により流されてしまっている状況も無視できない。

第2次大戦における原子爆弾の製造や高度成長に伴う公害は科学技術者の倫理という一般人の関心を惹く問題を提起したが、倫理学者の参加が消極的で学問的交流とはいえない。

社会的倫理とは別に、研究開発の世界の内部でも科学技術者の人文学的教養と識見が問われることがある。家事労働ロボットの開発における人文学との交流を文部科学省や経済産業省が推進している動向も、その一例と考えることができる。従来から、経営工学に関連した人間工学 *ergonomics* や、自動制御でソ連に遅れた米国が操縦する月ロケットの開発マン・マシン・システムという分野が存在したが、2005年7月、家事労働ロボットの開発に関連して、心理学など人文学との交流を促進するワークショップが文部科学省科学技術政策研究所の主催で開かれ、高官達や研究者達から交流の呼びかけがなされた[奥和田]。ロボットは最初は軍事や産業界で用いられたが、家事ロボットへの関心が高まったのは、開発側の非学際的発想と、視聴率を配慮するNHKその他のマスコミとの相互作用がある。

17歳以上の旧制高校における理系と文系の分離は受験戦争の中で激化し、戦後は18歳以下の新制高校の段階で高度成長の必要から文理の分離が進められた。さらに学生の社会的関心が低下し、産業空洞化で理工系学生と産業界との情報交換が空洞化すると、理工系学生は専門以外ではマスコミと身の回り日常に主に関心を向けるようになった。すでに早い段階で早大の加藤教授の研究室は、開発に学生達が情熱を傾けることができるように、ファッションモデルのように格好良く歩くロボットの開発をめざした。狙いは的中し、学生達は寝食を忘れ開発に没頭し、NHKその他のマスコミは、これを大きく報道した。

二本足で歩くロボットには、もちろん技術的チャレンジという意味もあった。

実用型ロボットは、コンベアが流れる脇で立作業する生産現場に用いられ、移動型ロボットも電車、自動車、ケーブルカーと同じ要領で移動していた。工学部が生産現場と密着していれば、このようなロボットで満足するはずだが、現場への関心が低下した時点では、これでは物足りず、二本足歩行ロボット、それも格好良く歩くロボットへ関心が向いていった。理工系というのは高校段階で物理や数学の技術的知識を教えるという意味から、実用より開発そのものを目的とする理学型価値観を工学に注入する理工系文化の成立へ進んでいた。二本足歩行のメカニズムやバランス感覚の解析には、実用的にはリハビリなど医学的意味があったが、実際の二本足歩行ロボットの開発は、多くの学生には関心のもてないリハビリより、ファッションモデルの模倣へ進んで行った。実際、リハビリについては医学的知識が必要になり、工学部にとっては困難であった。それに関して教授は、技術の波及効果で、純粋に工学的な技術が医学に転用できると主張したが、これも古典的な理学の論理である。古典理学はニュートンの「万有」引力のように、一旦成功すれば森羅万象に応用できる普遍的な一般理論を目的としていた。普遍性と個別性が理学と工学を分ける価値観であったが、理学は工学に接近し、実際には物性論（物質科学）のように特定条件下でのきめ細かい現象に注目するようになり、他方では普遍的な一般理論を目的とするスローガンを継続し、これが同じ理工系の工学に伝染したものである。工学は今も昔も効率を重視するが、それは個別の条件に左右される個別性重視型である。ファッションモデルの歩き方の解析と負傷者や片身マヒ者の歩き方の解析とを統合する一般理論が可能だとしても、工学的医学的実用性は期待できない。ファッションモデルにつき学ぶことにより片身マヒ者についての知見が得られるのは事実であり、中国語を学ぶことにより英語を学ぶノウハウが身に付くのは事実ではあるが、英語を学ぶために中国語を学ぶのは遠まわりで非効率なことは言うまでもない。効率を重視する工学が非効率を敢えて実行するのは自己否定である。原理的には歩いて行けるのに効率のために乗物を利用するから工学が成立するのであり、効率を否定すれば工学は無価値となるからである。

ファッションモデル型ロボットは歩くだけであったが、最近、二本足で歩きながら手も使えるロボットが開発された。開発者の言を鵜呑みしたのか独自の見解か、これをNHKは消火活動に利用できると報道した。手足の数が4本で消火器は手で操作すると制限されているのであればそのとおりだが、胴体に消火器を付けて車輪か四本足で歩いて火元に行き、ゴジラが口から火を噴くように口から消火剤を撒く方が簡単である。ビル火災で階段を昇降するとき、猿でさえ四本足を使うが、百足や、蛇のように足無しで昇降する動物もあり、段差を昇降する機械はすでにいろいろある。

挨拶したり握手するペットの犬のようなロボットが学園祭で人気を集めNHKで報道され、大学の研究室は夢中で開発する。それに比べ冷静なのが家事労働ロボットである。NHKにとっても、いちおうNHKらしく、しかも視聴者に馴染を持ってもらえるメリットがある。さすがに関係省庁は、ファッションモデルや握手ロボットよりは家事労働ロボットに関心を示した。全ての人が、ある程度の家事労働に関係しているから、医療や介護や建設現場を知らなくとも家事労働ロボット開発の見当がつき、学園祭やTVで喝采を浴びることができるのが、開発者にとってメリットである。しかし台所の構造や家事の習慣は家庭毎に異なるから、他人のことは開発者に分からない。これをロボットが認知、学習する必要がある。ここで心理学、人間学の動員が必要になった。しかしロボットメーカーが心理学などに手を出すのは研究開発リスクが大きい。費用的には心理学のようなスモールサイエンスへの進出リスクは大きくないが、人事労務的には異質の価値観や行動様式を持った異邦人を入れることへの抵抗が大きい。これはハードメーカーがソフトに進出するとき、同じ理工系で、しかも理工系の基礎であるはずの数学出身者を採用するに当たっての困難を想起すれば理解できる。もともと事務機械（ビジネスマシン、BM）メーカーであるIBMを除いて、ハードメーカーは企業内に事務系がいるのに、ビジネス向けソフトは開発できず、そのIBMも人工言語論からのソフト開発まではできなかった。ハードを作らないマイクロソフト社の大成功に見られるように、ハードメ

ーカーにとってソフトは、専門技術的にも、価値観や行動様式その他の文化面でも、馴染めないものだった。ロボットの「主人」の価値観が重要〔浅野〕ということで、企業行動様式の限界を破るために、国が乗り出す必要が生じたのである。

工学やメーカーに都合があって人文学との交流が進行しないということは、心理学、人間学にも都合があって、学際研究開発に困難が予想されることには、あまり気付かれていない。工学やメーカーが支配する現在の世の中で、人文学は意のままに動かせると思っているか、あるいは動くべきであると前提しているように見える。実際、大学改革で人文学は資金的困難に追い込まれる可能性があるから、米国のように資金で消費者心理などを創世し発達させてきたように、文部科学省の力で人文学を改革することは、ある程度は可能であろう。上で「動員」という語を用いた理由はここにある。

学問における動員の経験は第2次大戦に見られる。当時原子物理学と呼ばれた分野で圧倒的に強かったドイツより、はるかに遅れた米国で原爆が開発されたのは、電力などの資源の問題もあったが、大学が強い自治力を持っていたドイツでは科学動員が進まなかったことも大きな要因である。最近の大学改革はこの障害を除くことに成功した。しかし金や法制の力で動員しただけでは表面的協力しか得られない。これについて東条内閣の技術院も努力はしたが、その教訓が学ばれることなく大学改革や人文系動員が進められているのが現状である。文部省（当時）の強い指導性で新設された自称学際的新構想大学で、理化学と材工学の学際的分野の長となり、さらに心理学を含む社会科学も含む分野の長になった教授（のち副学長）が、「若いとき文科系にも関心があったが、文科系は年を取ってからでもできるから理系に進んだ」と書いている。受験体制下での文理の分離の状況では、小説を読むのが文学部であり、試験の前日丸暗記すればできるのが歴史学であると思う教授でも、自称学際大学（最近は正直になり学際を自称しなくなった）の副学長の適任者になるのは当然だが、人文学は2千年以上前にすでに体系化されていた豊富な歴史的遺産に満ちており、

その名のとうり人間性そのものに根差しているから、芸術と同じく、若い時の人格形成時にある程度の修養を積んでおく必要がある。人間学とは、人間を対象とする一種の動物学ではなく、人間が築いてきた文化（その中で人格が中核をなす）に関する学なのである（最近は動物学でも文化を扱う）。

本論は、過去における科学技術と人文学の交流の実際を調べ教訓を学ぶことを目的に、事例研究を試みる。科学技術と人文学の交流の代表とえば、技術哲学を展開した戸坂潤で、彼については多くの研究がされているが、科学技術内部の方法を用いた科学技術学術出版はないから、科学技術分野の研究者とは言いがたい。新カント派科学哲学に対して独自の弁証法を提唱し、世界の研究動向に逆らって多素粒子論への日本的物理学の道を方法論的に開拓した武谷三男は、人文学というより社会科学と自然科学の方法論的交流を展開しているが〔武谷他〕、武谷弁証法そのものについての専門哲学的著作はなく、あくまで科学方法論の範囲にとどまっている。ガリレイなどの科学史研究も既知の事実独自の解釈を加えたもので、史料考証を重視する歴史学の方法を用いておらず、学術出版はしていない。哲学と歴史という人文学の2本柱を物理の方法論に積極的に取り入れた業績は、本論文の目的に完全に合致しているが、彼についてはすでに多くの研究がされ、評価もされていることもあり、ここでは避けることにする。天野清も物理学研究の傍ら量子力学史の大著を遺したが、これも同じく学術的方法を用いていない。森鷗外は軍医で創作活動を展開したが、医学に関しても文学や歴史に関しても研究者ではない。彼の数本しかない医学論文は狭義の医学というより社会衛生学であり、代表作はドイツ地理学雑誌に発表されたことに示されるように（当時は文化人類学は地理学に属していた）日本の衛生文化、食文化を論じたものであり、その意味では興味深い（鷗外研究は多数あるが、彼の衛生文化論の方法論に関する研究はまだない）、狭義の医学の方法を用いた研究者ではない。文学は創作と翻訳で、歴史小説でさえ文献考証が学問的には不十分である。陸軍省医務局長という行政官でもあったことは興味深い、研究とは直結しないので、政策科学など別の観点からの研究課題

となる。斎藤茂吉は柿本人麻呂で学士院賞を受賞した第1級の文学研究者だが、医学に関しては優れた研究者とは見られていない（これについては後述）。医師で文学者は多く、学位取得など、ある程度の医学研究活動をするが、文学研究者は少ない。加藤周一も評論家と見られている。田中館愛橘は科学者でローマ字論を展開したが、言語学的研究はしていない。寺田寅彦は物理学の傍ら随筆家としても著名だが、文学的研究はしていない。SF作家海野十三は早大理工科卒で商工省電気試験所（のち通産省電子総合研究所、いま産業総合研究所）研究員として、いくつかの発明をしているが、文学は創作だけで研究はしていない。石原純は相対論研究者で歌人で、歌人原阿佐緒（松竹2枚目男優原保美の母）を妻としているが、歌道の研究者ではない。湯川秀樹も同様である。京大哲学教授を父に持つ朝永振一郎は、武谷の友人で哲学的にも興味ある解説や随筆を書いているが、学術論文ではない。本論では、東北大、東大医学部教授として医学研究者であり、詩人や劇作家である他に宗教史の実証的研究者でもあり、宗教史（「三田史学」に発表）や宗教美術史（大同石仏論）に関し学術出版の業績がある太田正雄（筆名木下奎太郎）を対象とする。

筆名の方が有名であり、実際、全集、日記、書簡、画集のタイトルも全て岩波書店その他は筆名を使っている。しかし「一応」本職は医学者であり、官吏として本名のみが使われている。本論では文芸関係では筆名、医学では本名を用いる。

奎太郎については多くはないが若干の研究が発表されている（巻末参考文献）。しかし本論文はこれらに基本的に言及しない。学術目的で発行されている本誌に書く以上は学術論文のマナーとして先行研究に詳細に言及すべきであるが、第5節に述べるように、これら諸研究は信じがたい偏りを見せている。それを具体的に詳細に指摘するのが文学研究のマナーであるが、本誌は経済大学機関誌であり、筆者も文学研究者として本学で教鞭をとっている訳ではないので、担当教育科目に関連した論文を発表する場という本誌の趣旨により、文学研究のマナーを無視させていただく。筆者は本学で技術論を教えたこともあり、ま

た筆者の終生の課題が文科理科を越えた方法論であったことから、その立場からは煩瑣な先行研究への批判は省略する。鷗外のように研究者数が多く、自身の論文数が数本で、それも医学とは言っても主要論文が地理学会に発表されるなど医学専門知識がなくとも読める論文ばかりでも、医学にまで踏み込んだ研究はきわめて少ない。正雄のように専門医学論文を書いた人物についてはなおさらである。さらに驚くことに、同じ文学系なのに、杳太郎の宗教史や美術史にさえ立ち入った研究はない。しかも後述の杉山氏は美学美術史出身で、奈良文化財研究所で正倉院など奈良時代から鎌倉時代的美術史専門家であり、正倉院美術の源であるペルシャでの発掘調査にも従事しているが、ガンダーラ美術と中国仏教美術の関係を研究した杳太郎について突っ込んだ研究をしていない。これは、これら先行研究者の個人的資質の問題というより、第5節に述べるように、学界や文学界を支配している独特の規制によると推測される。ここにこそ、本論文のように、学界や文学界の「文化」風習（因習）そのもの（科学社会学、科学人類学）や、研究の方法（科学哲学）についての研究視点からアプローチすることの意義があると思われる。

本論文は先行研究に言及することなく、杳太郎全集、日記、書簡集、百花譜（晩期の画集）、木下杳太郎宛知友書簡集（以上全て岩波書店）、および初期の絵を集めた「木下杳太郎画集」（用美社）を主資料にし、補助的に森鷗外全集、北原白秋全集、谷崎潤一郎全集、石川啄木全集、坂口安吾小説集、同評論集を使用している。杳太郎全集、日記、書簡のどこを資料にしているかは、文学の専門誌でない本誌の論文として省略した。先行研究などの通説と大きく異なる見解の根拠は、杳太郎の出身地伊東で発行されている「伊豆新聞」に資料根拠を付けて発表済みである〔江藤1996〕。

今日では人文科学という語が最も用いられるが、杳太郎のころは用いられていない。彼自身はユマニテ *humanité* あるいはヒューマニズム *humanism* という語を最も良く使い、とくに文学畑の研究者は文学内部（実際には小説作家に関する研究）の用語として、個人の個性を重視する一種の近代的モラルをユマ

ニテと呼ぶ場合が多く、この観点から、この語を彼を特徴づける概念として用いている〔新田1990, 新田1993, 新田1995, 杉山〕。この語は神の理性に対し人間の正直な感性（ホンネ）を重視する立場を指すことが多いので、文学至上主義の立場からは、反社会的な無頼やポルノを正当化する概念としても用いられる。また政治的には国家中心主義に対し個人を重視する、今で言うリベラルという意味（とくに非ファシズム、非軍国主義）で使われてきた事も多い〔新田1995, 高橋〕。実際、反ナチ・レジスタンスで仏共産党はユマニテという語で非共産主義者や反共主義者をも組織化した。特高検事や憲兵も個人として普通の人間で、容疑者や被告を人間的に扱い、戦後感謝された例は多いが、後述の左傾学生を普通の学生として扱った医学部教授会に決定に基づき彼らの思想善導に努力した正雄をユマニストである〔新田1993, 新田1995〕と呼ぶなら、教授会全体や、善導を依頼した特高村検事もユマニストである。しかし彼がフランス時代に覚えたユマニズムは、理系重視に対する古典重視の人文学という学問観であり、これは古典的な人格形成という伝統的修身を重視する学問観でもある。彼は東大時代、重工業の高度成長下にある満州帝国の高官に文化政策を重視することを進言し、「科学者からこのような言を聞くのは愉快である」とのコメントを貰っているが、これも人文主義である。医者是人を救うから、正雄もユマニストだという議論もある〔新田1993〕。また正雄は医学部教授として人間学の語も用いているが、これは人間という生物を扱うという意味での医学部向けの意味も籠めており、最近の大学改革や教養課程改革による人間学（心理学と哲学）あるいは旧師範系大学における教育学の基礎理論としての人間学とは異なる。西洋史学における人文主義の語は、神学からの解放という人間世俗重視主義で、ルネッサンス期における裸体画やボッカチオに見られる猥談、マキアベリ権謀術数政治学という意味もあり、ラテン語古典の重視による人格形成、修身という、彼がフランスから日本の雑誌に書き送ったユマニテとは正反対の面もある。本論文では、とくに必要がない限り原則として、人文学という語を用いる。これは彼自身もよく使った語であり、また学問観、学問方法論

を扱う本論文の目的に沿っており、また文学界で多用されているユマニテという語が狭い作家論や文化人論の印象を与える恐れを避ける利点があるからである。学生時代の杵太郎は、後に姦通罪で逮捕された白秋や、ポルノだから論評しないと理知主義の芥川に言われた長田秀雄と親しい耽美派詩人だったが、その後は文壇を離れ、しかし多くの文章を遺した（全集25巻の中で詩、小説、戯曲は各2巻、それ以外が19巻で、その殆どが文学創作以後）彼について、レットテルの貼り方に困って、医者是人を救い、彼も医者であったから、彼もユマニストだという苦しい三段論法〔新田1993〕もあるが、本論文は作家論ではないので、人文「学」が適切な語と考えられる。

2 学生時代における方法論的体験

太田正雄は明治18（1885）年、漁村だった静岡県賀茂郡湯川村（のち田方郡伊東町湯川、いま伊東市湯川）の有力者の営む天保6年創業の米惣という米屋（小さな漁村であるから本なども扱う万屋）に生まれ、湯川村の小学校（のち他の小学校と合併して伊東町小学校、現在伊東市立西小学校）から伊東町高等学校に進んだ。所在地は江戸時代初期、三浦按針が日本初の洋式船を造り、唐人川と呼ばれた跡地であるが〔牧野1979〕、漁村出身で後に16世紀から鎖国までのキリシタンを研究をした彼は、終生三浦按針の造船に触れていない。これは彼の脱亜入欧の近代的方法論が、故郷離れと結合していると解釈される〔江藤1996〕。卒業後、次兄円三の通う東京府立尋常中学校（のち府立第一中学、現在日比谷高校）を受験したが不合格で、私立独逸協会（独協）中学に入学した。親が医者にする目的でドイツ語を学ぶためだった。長兄賢治郎（次郎の意か）が県立中学、次兄が県立中学から姉の婚家に下宿し転校して東京尋中、姉達が東京のミッションスクールという、鉄道もない（国鉄伊東線は昭和13年開通）漁村の商家にしては教育熱心な家庭であった。米惣では福沢諭吉の「学問ノススメ」も売っていた。

長男が賢「次」郎、次男が円三というのは一種の長女相続で、長男が長女よ

り10歳以上年少だったため最初から長女相続を考えていたのか、息子の命名がずれている。少なくとも次男は完全に三男扱いである。漁村とは言えインテリ家庭だったためか兄弟姉妹に夭折者はいない。このとき父は40歳代前半の働き盛りだが、長男が4歳だったので、その成長を待てないと思い、長女相続を決定したのかも知れない。長女の夫が家督を継ぎ、正雄は長女夫婦をお父さん、お母さんと呼んで育った。日記に父と出てくるのは義兄のことであろう。実母は三島の実家に帰ったが、離婚したというより、長女に遠慮して身を引いただけか、研究書にない。文学者に関する研究は家族とくに家督について詳細に調べるのが通常であり、「家」研究こそが文学者研究の主要方法論である文学研究の「常道」が破られている事実も見逃せない。母との別離が絵や詩にどう影響したかは、文学絵画研究には重要だが、これについても文学的研究にない。空太郎に関する情報は太田一家が握り、周囲も有力者（長兄は伊東町長、市長）の家なので、都会から来る研究者に話さないからであろう。一高時代に三島、富士宮、富士五湖、箱根を旅行した際に、実母の実家を訪ねたことが日記にあるが、実母その人についての記述はない。科学方法論の立場からは「家」や母は重要でないが、文学研究の方法論としては重大な問題である。民法学の方法論としても、信州諏訪地方の長女相続は有名で詳細に調べられているのに、それ以外の地域については大阪船場の商家における長女の夫（番頭）による家督継承が上方文芸関係で有名である他は、民法学的に調べられていない。諏訪と伊東は方言（とくに「である」を短絡させて「づら」と言う）が共通である不思議について、国語学では注目されているが、国語学の問題意識は民法学に伝わっていない。なお、諏訪神社は旧伊東町から遠い郊外に小さい祠がある程度で、とくに人口の移動があったとは思えない。江戸時代にあった諏訪神社は他の2社と合併して新井村（いま伊東市新井）の村社（新井神社）に合祀された。その新井神社の神官の息子（のち神官）と高小の同級生で、一高時代に郷里に関する長い悪口を送っているが、神社には言及がない。教育意識の高さで知られる諏訪と、インテリ士族（江川家）のいた韮山から遠く教育不熱心な伊東と

は、価値観という面で文化的相違が大きく、江戸時代に特に文化的交流があったと思えない。長女継承または年長子継承の伝統や意味は、皇室典範改正において重要な問題であるが、政治的必要性の観点からのみ討議され文化的意味は論じられて来なかった。家長継承は宗教儀式の主催者が家長であることと関係し、国の天皇と天皇「家」の宗教である神道の儀式における継承者との一致不一致が天皇家の儀式を重視する立場から問題視される。諏訪以外にも長女継承や年長子継承が多いとすれば、祖先神（皇祖）崇拜と長女または年長子継承が一般的には両立することになり、その逆であるとすれば男子継承の一根拠となるが、皇室典範の法律論や政治論と、民法、民間習俗、民間信仰、家族論の交流がないことが、最近の皇室論議から示されている。皇室典範改正論議も民法研究も、皇位や財産の継承という観点だけからなされ、文化風習そのものへの関心はない。

正雄は独協中学で長田秀雄に出会い、文学的刺激を受け、ともに同人雑誌を出す。この頃すでに後の杢太郎の筆名に直結する文が現れる。独協中学では後に日本史研究の方法論を確立した津田左右吉（今も日本史学は津田史学と呼ばれる）から学ぶが、日記、書簡、膨大な著作で津田の名が現れるのは、ずっと後に津田が不敬罪で訴追されたとき、同窓会の委員として支援に関連したときだけで、大正時代に確立された津田史学方法論には最後まで無関心で、明治末から大正初期に確立された鷗外の歴史小説の史実主義に固執した。

一方、次兄円三は歌舞伎や、姉妹が習っていた邦楽のほか、絵画をたしなみ、東大で建築を学び、鉄道院に入り鉄橋の設計に従事する。その影響か否かは日記から明らかなでないが、杢太郎も美術を志し、美術学校を希望するが親の反対で一高に入る。一高で画友会に入るが、一高の校風に馴染めず寮に入らず下宿生活をし、絵画は美校洋画科初代教授黒田清輝の画塾で学ぶ。官立学校の官吏が私塾を開くことは、当時でも公に認められていた訳ではないかも知れないが、公に問題化しない時代であった。杢太郎は大学時代、兄の影響か否かは日記から不明だが、隅田川の橋の絵を描き、詩を作っている。日記を見る限り橋の絵

はセーヌ川への憧れである。橋の詩は逆に、橋の下を通る船の前近代的な船頭が主題であり、西洋近代と日本前近代の相克という日本近代文化の矛盾を典型的に表現している。この矛盾は鴎外の衛生学や正雄の文化論と細菌学のテーマに影響を与えている。

美校は断念しても一高時代は船で房総海岸へ2度ほど写生旅行している。海なら郷里伊豆にもあるが、なぜ郷里でなく房総なのか日記からは分からない。研究書も〔江藤1996〕を除いて、この問題に触れていないのは、文学研究の方法論に従った文学者や美学者による諸研究書と、文学研究の方法論と異なる方法論を採用した〔江藤1996〕との相違であろう。直接の理由ではないと思われるが、一高時代は心身不調で結核を心配し何度か医者を訪ねているほか、憂鬱な感情を何度も日記に書いている。しかし、この憂鬱に徹して文学の道に進むことは全く考えていないようで、せっかく夏目金之助（漱石）教授から2年間英語を習いながら、当時「猫」を連載し注目されていた漱石からとくに「印象をうけていない」。独協出身で英語が不得手だったこともあろう。親の希望で東大医学部に入ってから、医学に興味を持てないまま与謝野鉄幹晶子の新詩社に入るが、最初は天下の帝大生という肩書を除けば門下で無名な存在だった。明治40（1909）年の夏休み、新詩社門下生の長崎、平戸、天草地方の「修学旅行」に参加し、同行の北原白秋のキリシタン詩に刺激され詩作を始め、たちまち白秋その他の注目を受けた。その際、黒田の属する外光派や当時流行していた印象派の色彩論から学んだ手法を意識的に詩に取り入れて成功している。彼は一般的には方法論や文学芸術政治思想などの抽象論一般論が嫌いだったが、彼の名を始めて高めた詩は意図的に他分野の方法論を採用したものであった。

詩人として知られ、鴎外邸における観潮会にも招かれるようになったが、放蕩や淫蕩で有名な白秋、秀雄、吉井勇、石川啄木などとの交遊に忙しく、薬理学の試験の日時を忘れ、留年に追い込まれる。教授に頼み込むよう鴎外に泣きつき、鴎外も教授に口をきいてくれるが不成功に終わった。このことについて 奎太郎日記と鴎外日記は記述が完全に一致する。商家の出身である奎太郎にと

ってコネを利用する道徳は当然だが、陸軍省医務局長である鷗外が悪びれることなくコネで知人の便宜を図った事実は、官界の道徳慣習を示すものとして興味深い。

留年の結果、1年下の茂吉と同級になるが、放蕩歌人の勇や啄木とは深い交友である一方、古典的歌道（のち万葉調）の茂吉とは、当時とはくに交遊はない。このころ東大生には、学者である漱石の門下で学問的に文学を研究する小宮豊隆などがいたが、彼らから意図的に離れていたことが日記や書簡から分かる。姉達が習っていた邦楽を幼時から耳にして音感が良かったのか、語調の美しさに注目された杢太郎の南蛮キリシタン詩は、東大に村上教授による南蛮キリシタン語の講義があったにもかかわらず出席していないので、語学的誤謬がある可能性を杢太郎自身気付いて、文学研究者を避けていたと解釈される〔江藤1996〕。実際、後に芥川が多数の誤謬に気がついている。これは後の実証に徹した杢太郎の史実主義と矛盾するが、医学部で多忙だったため調査不足だったことと、交遊していた同僚詩人歌人達の文学は事実を越える価値があるとの文学至上主義の影響と思われる。

放蕩仲間との交遊で忙しかったため、明治45（1912）年に医局を選ぶとき困って鷗外に相談し、細菌学を薦められた。ちょうど細菌学の創始者と言われるコッホ R. Kochが弟子北里柴三郎のいる日本を訪問し、その接待の責任者を鷗外が務めたときである。まだ権威は全くなかった時代とはいえ、第1回ノーベル医学賞の候補に細菌学の北里や野口英世が挙げられるなど、後進国日本で数少ない世界トップ分野であるから、細菌学は難関教室で彼には無理だった。次に鷗外が薦めたのは皮膚科泌尿器科学土肥慶蔵教授だった。薦めたのは皮膚科か、泌尿器科か、土肥教授か、鷗外日記には記述がない。杢太郎日記によれば泌尿器科ではないらしいが、これは彼自身が泌尿器科に無関心だったからかも知れない。直前まで皮膚科も泌尿器科も内科に含まれており、土肥が初代であったから新しい分野として推薦した可能性もあるし、泌尿器科の主要疾患は性病で軍隊の衛生にとっては重要関心事であり、正雄が温泉地出身で性病の多い

所であることを考えた可能性もある。土肥は外語学校（現在東京外語大）から医学部に来てドイツ語に堪能でドイツ留学時に評価され、東洋医学に関する書物をドイツ語で書いているから、独協出身でドイツ語ができる正雄に合っていると思った可能性もある。あるいは西洋一辺倒の奎太郎に東洋医学に関心を向けるよう仕向けたかも知れない。写真が高価だった当時、皮膚科はカルテに図を描くから絵が得意の彼に向いていると思ったのかも知れない。事実、土肥は「成績は下から数えた方が早い」正雄を歓迎しなかったが「絵が描けるというので入れた。」そして細菌学教室に頼んで3月訓練させた後で入れた。当時の細菌学は顕微鏡写真を撮らず像を見ながら図を描いたから、細菌学教室でも重宝がられたかも知れない。写生は医学で重要な方法であり、後にフランスで細菌分類に従事し、東大から学位を得るのに役立ったと思われる。後に彼の最大業績になる太田母斑も、斑の図的認識（今日の計算機科学のパターン認識）の産物と言える。絵に関し教授の公認を得たからか、彼の放蕩文学を教授が嫌ったからか、医局員時代は詩作より美術評論が多く、美術史書の翻訳もある。

彼が医学部に入る直前まで内科にはドイツ人ベルツ E. von Bälz 教授が26年もおり、ベルツ水（グリセリンカリ液）の開発で知られるように皮膚科も扱っていた。ベルツはローマ医学の伝統からか温泉の効用を説き、夏は草津の別荘で過ごし、春秋は箱根で休んだ。ベルツ水は箱根温泉で思いついたものである。ドイツ語に堪能で温泉地出身の正雄がベルツの刺激を受けることなく温泉に無関心だったのは、脱亜入欧で郷里から離れようとする彼の学問観によると思われる [江藤1996]。

3 在外時代における方法論的体験

第1次大戦で欧州留学が不可能な大正5（1916）年、彼は奉天（いま瀋陽）の南満医学堂のポストを土肥から世話され、不本意ながら渡満する。土肥の思惑か、在満時代は文学仲間から離れる。東洋医学の泰斗である土肥の薫陶も無視して、正雄は中国文化にほとんど関心を持たなかった（後に日本の大陸進出

が進み、中国への関心が高まってからは、在満時代の経験を活かした活動もするようになるが)。語学の才に恵まれていたにもかかわらず、中国語をとくには勉強していない。孫文の中華民国革命や、第1次大戦で西欧の没落を先取した東洋文化見直し論が高まる中、彼は渡満直前「新東洋主義を排す」を「中央公論」に発表して西洋文化の優越を主張している。いわば文化果つる満州で憂鬱な年月を過ごしたことが日記、書簡から分かる。水虫などの臨床の傍ら、その病原である白癬菌の研究に従事し、いくつかの垂種を発見、学術論文を書くが、「南満医学雑誌」という外国はもちろん日本でも読んでもらえない雑誌に発表しただけである。台北帝大紀要でさえ読まれず、湯川論文の1年前にほぼ同内容の論文が掲載されたが、湯川ら理研グループに読まれなかった。医学と文学の両面で無視された彼は思い切って職を捨て、妻の実家の資金で欧州に留学する決意をし、一度日本に帰るため、奉天を離れる。

奉天からまっすぐ帰国せず、仏教とギリシャ彫刻の融合への関心で山西省大同の石仏を調査し、後に学術出版する。彼自身は知らないか無関心な事柄であるが、原始仏教に偶像崇拜はなく言葉（真言）と修業が全てだったが、アレクサンダー侵略の影響で偶像崇拜が仏教に入ったものである。言葉のみを扱う詩人である彼にとって、本来、彫刻は関心外のはずだが、脱亜入欧の方法論を持つ彼としては、彫刻そのものより西洋が問題だったのかも知れず、また絵画で磨いた感覚で彫刻への感覚にも自信があったと考えられる。彼は仏教に無関心で、家の寺に墓参には行くが、その宗派や建築、内装などについて日記に全く述べていない。伊東は源氏の影響で禅寺が多く、家の寺も禅宗であり、後に禅宗が世界的に注目されるのだが、日記に全く触れていない。大同でも仏教そのものには無関心で、外面的な彫刻技術に関心を向けている。

日本から欧州に直行しないで、ドイツ語に比べ英語は得意でないのに、まず渡米する。当時は米国の医学水準は低く、限られた妻の実家からの資金で、回り道した理由は、留学目的が医学でなく文壇への復帰にあったからと考えられる[江藤1996]。彼の学生時代の放蕩詩の多くは永井荷風が主宰する「三田文学」

に発表されている。東大文学部のアカデミズムに対し、鷗外は慶応文学部設置に際し荷風と晶子を教授に推薦している。荷風は放蕩者であり、「あめりか物語」「ふらんす物語」に示されるように外国でも遊んだが、空太郎は荷風を追体験することを一つの目的としていたと解釈できる。勉強先も、ドイツ語が得意で医学の中心国であるドイツより、苦手なフランス語にもかかわらずフランス、それも最終的には荷風と同じリヨンとした理由が推測できる。荷風を追体験し、帰国後は荷風が主宰する「三田文学」に関係したかったとすれば、最適の環境と言える。

正雄はドイツに留学している茂吉を訪ねてはいるが、戦後の混乱でドイツの研究状況は荒れているとの理由でフランスを選び（1921－24）、言葉に苦勞するが、パリで不潔な貧民窟に近く皮膚病患者が多いサンルイ St. Louis 病院のサブロー R. Sabouraud 博士に師事することができた。サブローは白癬菌の権威である。何十年か前サブロー自身による白癬菌の分類に、その後の新種の発見を取り入れて改訂する作業に従事しているサブローの弟子ランゲロン M. Langeron の助手が割り当てられた。満州で白癬菌の新種を発見した業績を活かせる仕事である。分類学はリンネの植物分類以来、形態に注目する方法論が採用されるから、顕微鏡の像を正確に写生する技術が要求されるので、まさに正雄に適しているはずだが、単なる助手には満足できなかったのか、ここでも憂鬱な生活を送る。分類は系統付けることであり、アリストテレス以来、体系化する能力が要求されるが、彼自身「思想的なことは嫌い」と言うように、異国情調に富んだ南蛮語の音の美しさを強調する詩人である彼は体系化が不得手だった。学術論文としては第2著者としての共著論文を1本発表しただけであった。ランゲロンがリヨンに職を得ていたためか、正雄はパリからリヨンに移って研究している。菌の分類の問題は生物観である。動物か植物か、第3の生物であるかが問題になる。大きく固い生物は化石を遺すので、進化を手がかりに分類できるが、菌に対しては応用できない。ちょうどこのころ、白癬菌 trichomycetes を絲状菌 fungi の一種である放線菌 actinomyces の一種 actino-

mycetales と呼ばれるようになった。古くは分岐菌または分枝菌 streptothrix と呼ばれていた菌も放線菌と呼ぶ説が強くなった。一方植物学と異なり、実際の医学では絲状菌と真菌 eumycetes を同一視する。正雄自身あまり厳密に区別しないで使っている。講義録を見ても彼自身の観方は定まっていない。上述のように植物学では形態で分類するが、医学ではまず人間に有害か否かで分類する場合が多く、サブローの分類観もそうだった。医学では次にどの部位にどのような症状を起すかという实际的立場で分類する。正雄は混乱し、「サブローの不興を買った。」

留学中に癬風菌 pityriasis versicolorの論文により東大医学部から学位を得た。これはクロナマズとも呼ばれる円形の斑を皮膚に起す。後の太田母斑に似た点があるが、日記や講義録などに太田母斑の問題意識との関連は述べていない。そもそも彼は学位論文または癬風菌のことを他の場で述べていない。

フランス語が不得手だったためか、パリでは児島喜久雄画伯はじめ日本人達と交際し、とくに児島とは「殆ど毎日行動を共にして居った」（児島）。児島その他の日本人グループでエジプトにも行っている。リヨン時代の生活は日記や書簡からは詳細不明である。リヨンには横浜正金銀行支店があり（荷風は父のコネでそこで働いていた）実業関係者は多かったが、伊藤氏（米国から英国に行く船で会った伊東氏と同一？）を除けば交遊は日記にない。古い教会の多い町だが文学美術関係の日本人は少ないから、寂しい生活だったようである。ホテルに下宿し外食しているが、パリでは美食を楽しんだ彼は、食い倒れと言われるリヨンに移って、どの店がうまい、まずいと書いているが、それほどには食を楽しんでいない。日本人グループからレストラン情報が得られるパリと、それがないリヨンとの違いであろうか、それとも研究に多忙だったためかも知れない。妻に金送れの激しい手紙を少なくとも2度出しているが、実家としては遊興を警戒して金をあまり送らなかつたのかも知れない。日記や友人への書簡からは遊興は窺われず、後年の日記に、高い岸壁で清掃奉仕している日本の女学生を低い船から見上げながら、日本人の醜さをパリのデッサン教室のヌー

ドモデルに比べているのが出てくるだけである。日記や書簡から分かる金の使途は顕微鏡や書物の購入と、エジプトその他の旅行だが、美食に出費したことが帰国してからの作品から分かる。第1次大戦で成金になった日本人が、パリの華麗な生活を体験した作家達の作品をガイドブック代わりに、パリに旅行したことが知られているが、日本で文壇に復帰する希望だったとすれば、パリでの美食は必要経費だったと言える。彼自身の稼ぎとしては日本の雑誌にフランス文壇事情を書いて稿料を得ている。留学の最後にリスボンの図書館や古書店で宣教師の資料を集め、これを後に翻訳してキリシタン史研究に貢献しているが、最初は創作の材料集めが目的だったと書いている。学生時代にキリシタン詩人、キリシタン戯曲作者（学生時代の戯曲「南蛮寺前」は鷗外と、ドイツから帰国した山田耕筈から注目された）にとして注目された実績を利用して創作に励む計画だった。

第1次大戦が新兵器の大量使用という技術産業戦争だった教訓から、欧州では理科教育の強化が叫ばれ、その結果、古典教育が犠牲になったが、これについて人文学教育の維持を求める意見も出され、医学より文壇復帰を考えていたのか、杳太郎は人文学擁護の立場から、この論争を何度か日本の雑誌に紹介している。人文学にはいくつかの意義があり、かれは古典教育の意義にのみ解しているが、日本の論語読みと同じく、古典教育はプラトン、キケロ、セネカの作品を読んで人格を高める修身教育、徳育の意味がむしろ本来なのに、知ってか知らずか、徳育については触れていない。

4 帝大教授時代の医学・人文学の方法論

彼は帰国後、東京で勤務することを強く望んだ。珍しいことではないが、文壇復帰希望だったとすれば当然である。慈恵医大を狙い、創立者の1人である高木海軍軍医総監に頼んだりしたが、結局、東大皮膚科の同僚で同じ白癬菌専門の田村が初代学長の新設愛知医大（のち名大医学部）に就職した。日記によれば不満だらけの毎日で、読まれないようフランス語で妻や同僚の悪口を書き

綴っている。子供そのものの悪口はないが、家庭の居心地の悪さへの不満は妻への不満だけではないであろう。事実長男は後に、物心つく頃に不在だった父に親近感を持てなかったと書いている。これは家族を日本において在外生活した者に共通の問題で、日本のエリート全体、そして彼らによって築かれた日本の社会文化システム全体の問題であり、その分析評価の方法論として重要だが、ここでは省略する。パリ体験の美食小説は不評で、爾後、小説は一切書かなくなった。しかし、医学研究に集中した訳ではない。新設大学で研究条件が整備していなかった面もあったと推測されるが、留学中の菌の分類が単に助手として貢献しただけと解釈すれば、この研究を日本で一人で展開することは不可能で、適切な研究課題が見つからなかったと推察される。茸は菌の一種であるが、後に仙台時代、彼は何度か休日に茸採りしたことが日記に記されている。しかし菌の分類との関連については触れていない。

東北帝大医学部皮膚科泌尿器科遠山教授が東大に戻り、大正15（1926）年、正雄は東北大に移る。東北大は理学部など独創研究を重視する雰囲気が強いが、医学部もアカデミックで、皮膚科のような臨床分野でも若手は生理学など新しい基礎分野への関心が強く、基礎の勉強を怠ってきた正雄は困惑するが、幸い若手は正雄の希望に沿って臨床に徹し、彼の癩病（レプラ, *repla*）菌の培養研究に協力してくれた。これは衛生状態の悪い東北農村に多い病気で、革命運動などの影響で社会関心の強かった若手が、社会問題となっている癩に関心を持ってくれたためと解釈される。癩は弱い菌で伝染力も弱いが一旦発病すると重大であり、患者を出した家庭は周囲から村八分扱いを受けるなど、社会的にも重大だった。弱い菌のため培養が困難で、そのため正体が掴めず、抜本的治療法が無く、ハンセンA. Hansenの提案で患者を隔離するのが唯一最良の方法とされた。この措置が今日、人権侵害とされ、癩の病名も差別を表す語として死語とされ、ハンセン病 *Hansen disease* と呼び換えられているが、皮肉なことにハンセン博士こそが隔離という人権侵害を提唱し、熱心に社会を説得し実現させた「犯人」であるので、本論では正雄もよく用いたレプラと呼ぶことにする。

コッホ、北里、志賀潔などが扱った菌は強力で、彼らの用いた方法であるコッホの4原則は弱いレプラ菌に应用できず、とくに新しい方法も思いつかなかった。弱い菌なので菌を含む病巣を健康体に接種しても感染率が低く、慢性病なので急速に顕著な発病をすることはなく、辛抱強さだけが武器だった。時間との勝負だから、ラットなど安価な小動物では寿命が短か過ぎるためか、鶏など比較的高価な中動物を使うためであろう、実験体の数も少なく、信頼できる結果を得るのは困難だったと推測される。少数例の実験から比較的信頼できる結果を得る統計手法が開発されていた時代であるが[増山]、理論的なことが嫌いな正雄は数理統計学の最新の動向に疎かった。数年後に、成果を挙げたと信じ発表、その業績で遠山が定年で去った東大皮膚科に帰えることになる。

仙台では皮膚科は独立でなく明治時代の東大のように泌尿器科も兼ねた。経験はなかったが、日記によれば腎臓癌手術など無事にこなしている。癌手術は医局全体の協力が必要で、若手は医学最前線である癌手術に積極的に参加したと推察されるが、日記は「x月y日、腎臓癌手術」という程度の記述しかない。講座は皮膚病梅毒学で、宮城県当局や警察に依頼され、泌尿器科の一部である性病について予防活動に協力し、結核やレプラと並んで国家的課題だった梅毒について調べ、新大陸との交流史など西洋文化論的にも興味ある講義をしたと推察される。後の東大での梅毒講義は学生から好評で、いま読んででも楽しい講義録が遺されている。梅毒講義に関する限り、彼の人文的素養が十二分に活かされている。しかし彼自身は性病関係の論文は出していない。教養溢れる楽しい名講義と分析の実証的な臨床医学論文との距離を、彼は埋めることができなかった。東北ではないが草津温泉が性病に有効と江戸時代から知られているが、温泉地出身の彼は全く言及していない。この頃、温泉医学会が結成され、医学会総会が東京で開かれた折りに開かれた東京での会合に出席しているが、それ以上の記述は日記になく、論文はもちろん随筆も書いていない。戦時中、郷里伊東に帰省した折りに、町長である長兄の肝煎で温泉関係の会合に出席するが、これも日記に出席した旨が記されているだけで、温泉を含め民間療法に

は無関心で、灸按摩の類についても日記に記述はない。

肝心の皮膚病については、患者の多くが皮膚病なのに、研究面では深い関心を払っていない。皮膚表面は昔からよく観察され、難しい漢字が並ぶ古典的病名が多く、今さら新しい発見が少ない分野である。転任に際し、東大の医局や教授会での新任挨拶で皮膚科学の行き詰まりを打開する能力はないと述べている。昔から温泉療法があるが、これについても論文、随筆、日記、書簡で触れていない。皮膚癌患者も扱っているが、論文になっていない。ただ母斑に関して新しい発見を得ている。母斑は遺伝的で抜本的治療法はなく、生命の危険もないため、過去の医学では軽視されていたが、顔などに発現すると美容上問題となり、美容整形が現れた昭和初期、昭和恐慌の財政難で独立採算に追い込まれた大学病院の市場開発の対象となった。東北大末期に医局の佐藤三郎に母斑研究の課題を与え成功して論文になったが、東大に移ってすぐ谷野博に課題として与え成功したのが太田母斑（眼・上顎部・褐青色母斑）である。これは日本で多様な人の多様な部位に現れるが、比較的若い30代女性の顔面にとくに多く現れるから深刻である。日本人にも見られる蒙古斑は乳幼児の見えない臀部で、就学ごろまでに消えるが、この母斑は逆に成人の顔に現れ、最初は加齢によるくすみに似ているが、傷跡の痣のように大きく濃くなると化粧で隠せない。米国女性が、既婚年齢の日本人女性の顔の殴られた跡のような痣から、日本の家庭内暴力を問題にするが、太田母斑の場合も多い。形、面積、色も多様だから、他の母斑や単なるくすみとの区別が困難だが、正雄の指導で谷野はこれを特定する診断法を開発し、東大医学部の全国組織力で日本医師会に認められる病名になっている。美術に関係してきた正雄の、形や色、また容貌に関する造詣が、この母斑を他の母斑から識別する方法を開発させたのかも知れないが、日記からは谷野に任せきりだったと推測される。東大での講義録でも簡単に触れているだけで、当時学生だった医師の記憶でも、識別の方法や、それを開発したときの工夫などは講義されていない。日記によれば、研究の関心はレプラに集中している。

帝国大学令は帝大は国家に須要な人材を養成することを目的と定めているが、昭和恐慌により文部省が大学病院の採算性を要求しても、大学の研究は採算を無視しても国家に必須重要なテーマを追求することが多かった。遊興文学に浸っていた学生時代を除けば、彼にとって東北大が官吏としては初の帝大であるが、レプラ、梅毒、癌など国家に須要なテーマを彼も追求していた。研究以外では、日赤に依頼された東北大医学部による僻地の巡回医療も国家に須要な活動だった。これに正雄も参加している。東京の文壇から離れ、東京の文芸雑誌に、文学から離れて僻地医療に従事していると書いている。しかし実は労働者農民と密着した文学こそが当時は注目されていた。そして後に「わが愛は山の彼方に」を書いた「高橋実という赤の学生」（正雄）は巡回医療の参加者だった。温泉町出身で江戸下町情緒を残す下町を文学拠点としていた杢太郎にとって、僻地と文学は結びつかなかったのであろう。レプラを研究しながら、瀬戸内海の島に隔離された患者の文学には無関心で、後に東大時代に雑誌社に頼まれて当時話題になった「小島の春」などを巡る座談会に出たり、戦前左翼雑誌だった「改造」の軍需産業における産業文学（戦前の労働者文学、いまの職場文学）の座談会に出たりする程度だった。

昭和初期の革命運動に医学生も参加し、多数の逮捕者を出した。文部省に思想局が設けられた時代で、特高は保釈者の保護観察を含め学生思想の思想善導を大学に要求した。医学部の定員は内務省厚生局（のち厚生省）との協議により定められているので、政治的理由で退学処分にすると、医療計画に支障が生じる。左傾学生思想の思想善導は、とくに医学部で重要だった。特高中村義郎検事から弟の隆東北大医学部助手を介して依頼された正雄は、医学部教授会で、彼らにマルクスの代わりに鵬外思想を学ばせることを提案し、賛同を得て、彼が実行することになり、「森鵬外の会」を発足させた。上記高橋を含む保釈中の医学生を集め、河野与一法文学部助教授の協力を得て、研究会を持った。実際には彼がすぐ東大に移ったため、彼自身による研究会は3回で終わったが、これはユマニテ思想という杢太郎研究の根幹に直結する重要テーマとなっている。これ

は恐らく、高橋や李太郎の甥太田慶太郎の問題意識により重視され、新田によって発展されたアプローチと思われる。

仙台時代の（あるいは全生涯を通じて）正雄の思想はユマニテと特徴づけられている [例えば、新田1990、新田1993、杉山]。彼自身、医学と文学に共通する概念として人間学という語も使っている。第1次大戦後フランスで人文学教育を巡る論争があり、留学していた李太郎はこれに関心を持ち、日本の雑誌に紹介したが、帰国直後の愛知時代や仙台時代初期を除いて、仙台時代末期、ユマニテを説いた。人文主義には多様な意味があるが、昭和初期の革命運動とその弾圧の時代には、革命運動を支持はしないが苛酷な弾圧は支持しない、一種の人権擁護（戦後の進歩的文化人の立場に近い）思想を指すことが多く、戦時中は反戦運動には参加しないが、戦争に非協力で、反戦運動弾圧に批判的態度を採ることを指すことが多かった。高橋などが李太郎をユマニストとみなすのは、この意味と解される。最も古い意味での人文主義は古典を学ぶことで道徳的に人格を磨くという意味だが、死後わずか10年ほどの鵬外を古典と呼ぶかという疑問を除けば、鵬外の思想や人格を学ぶことで思想を善導するという意味では、本来の意味から離れてはいないと言える。奇しくも彼が留学したフランスでは、後に第2次大戦末期のレジスタンスを人間回復と捉え、運動の中核となった共産党は機関紙をユマニテと名づけたが、フランス生活で李太郎もこのセンス（感覚、意味）を直感的に身に付け、また戦後共産主義運動を復活した高橋や慶太郎（戦前、浦和高校社研、東大新人会）もフランス共産党のセンスで、ユマニテと呼んだのであろう（[高橋] は当時の自分たちをヒューマニストと呼んでいる）。戦後、共産主義嫌いで、共産党批判を内に秘めた進歩的文学者達がユマニテという語で自分達を特徴づけたが、個人主義で組織的活動を嫌う（昭和30年代の日本のユマニストは組織悪という語を多用した）という意味を持つ反面、仏共産党機関紙の名でもあるなど、多義的なので便利なレッテルである。李太郎は学生時代は耽美派などと呼ばれたが、渡満以後は文壇を離れ、どの流派からも離れたため、適合するレッテルがなく、消去法でユマニストと呼

ばれることになった面もある。上述のように広く多義的な語だから、人文科学や文芸を扱っていれば、医薬や教育で人間を扱っていれば、あるいは少しでも人情愛情のある人（ない人がいるとは思えない。事実、多くの特高は拷問により自白や転向を得た後は優しい人間に戻り、戦後追放されて生活に困ったとき、共産主義者から助けてもらった者も少なからずいる）であれば、貼り付けることができるレッテルである。

東京の文壇からは離れたが、二高と東北大法文学部の文学関係者と杳太郎は連歌の会を催したり、狭い仙台の町で互いの家を散歩ついでに頻繁に訪れたりしている。連歌では、最後の国学者と言われる山田孝雄や、学生時代は意図的に疎遠だった小宮豊隆と一緒にであり、古今の西洋文化に博学な河野与一や小宮は足繁く彼の自宅を訪ねている。国語学と国文学を区別せず総合的に扱う国学は漢学と並んで東洋の人文学と言うべきだが、孝雄とそういう話はしていない。パリで親しくした児島も東北大で、阿部次郎、安部能成とも一緒になった。児島や阿部の関係で安井曾太郎や梅原竜三郎の来仙のおり、接待に加わり、交際は東大に移ってから深くなった。仙台時代が最も楽しかったと後に杳太郎は述べているが、日記に憂鬱なことがほとんど記されていない唯一の時代だった。愛知時代と異なり、家庭的にも平和な時代だった。

レブラの研究がその時点では認められ、昭和12（1937）年、東大に招かれるが、なぜか給料がかなり下がり、この不満を含め、東大移動への後悔が日記に長々と記されている。日記にあるように、正雄の古典的なコッホ4原則による細菌学に若手は完全に非協力で、幸い付属の伝染病研究所でレブラ菌培養研究が続けられることになったが、白金の研究所に市電を乗り継いで行くのは苦勞だった。途中の六本木の竜土軒などで豪華な昼食を摂ってから行くのがせめてもの慰めだったようである。優秀な医局員には恵まれ、谷野と共著で太田母斑の論文を1本発表し、これが後世に遺る論文となったのは今から見るとメリットだったが、太田母斑について日記にとくには記述はない。文壇の中心地東京に帰り、文芸雑誌、一般雑誌との交際が多くなり、いつも机に向かって書き物

ばかりで若手の実験をみてくれないとの不満が若手から出ている。実際には若手の最新の基礎的研究テーマが分からなかったと思われる。雑誌との交際が忙しくて最先端の研究について行けなかった面もあるが、最先端医学研究から離れて文芸に戻りたかったとも解釈できる。

師弟関係を重視する医学では、弟子は必ず師を褒めるが、元学生達が彼を讃える文のほとんどが、語学や文芸の才を挙げている。逆に言えば医学そのものの業績を讃えていない。医学に関することで弟子が最も讃えているのは、タバコモザイク病菌がウイルスだとする彼の見透しが的中したことだが、これは当時、他にも多くの学者が予想していたことである。太田母斑の谷野は、これが戦後注目されたメラニン色素の問題に連なったことで師を讃えているが、痣や母斑がメラニン色素と関連することは古くから分かっており、戦前は伝染病の類に関心が向けられて、生死に直結しないメラニン色素の研究は優先されていなかっただけである。良く言えば、正雄の医学研究は文芸活動で磨いたセンス（感覚、直感、意味）で生命、生体の本質を見透していたということだが、すぐにも論文を書く立場の若手からは、困った先生だったのであろう。古い方法論に固執する専門のレプラ菌培養は長期戦となり、最先端医学に関心を向けたが若手は避けるテーマだった。

東大で比較的楽しかったと推測されるのは、若手を集めた時習会である。文学好きの学生の求めに応じた本来は文学の勉強会であるが、日中戦争頃から中国古典に関心を向けた彼は、「学んで時にこれを習う」という論語の冒頭から、時習会と名付けたらしい。中国古典の他、基礎医学の最先端の話題を扱う学生も参加し、菌より小さく濾過膜を通過してしまう濾過性細菌（ウイルス）や生化学についても扱っている。学生からのリクエストであろうか、江上理学士を時習会に招いたと日記に出ている。学際の華と言うべき生化学の江上不二夫と思われる。満州国奉天の盛京医大楊潤滋医師から光の刺激と植物アカザの影響による過敏性皮膚病（一種の紅斑性狼瘡）のことを聞き、狭義の医学論文の他に、学生時代から愛好し翻訳も出版しているゲーテが光について自然学的論文

を書いていることを思い出し、それについての随想を書き、講義でも述べている。学問的には共著論文にとどまった。彼自身は意識していないが、物理（光力学）と当時最先端学際領域である生化学とをつなぐ超学際領域に属するテーマである。なお当時は英語の学際 *interdiscipline* と言わずドイツ語から境界領域 *Grenzgebiet* と言った。このころ彼は昭和の鷗外と呼ばれているが、日本のゲーテを目指していたかも知れない。文学を主とするゲーテは、狭い専門を越えた総合性を天才と呼ぶ19世紀初めのドイツの価値観により自然学にも手を出しているが、正雄はゲーテ時代の天才論を知っていたと思われる。しかし、ゲーテ思想を体系的に医学方法論に取り入れるというよりは、発想展開のヒント、いわゆる発見の論理と考えていたのであろう。

仙台時代のレプラ菌の培養という「大業績」は厳密には確証できなかったが、東大でも培養成功と報告し、記者会見もして一般紙にも報道されたこともある。詩人として覚えている人も多い他、美術批評や随筆その他で新聞雑誌に頻繁に名前を出す有名人が国家的課題であるレプラに世界的業績を挙げたということで、各紙は大きく報道したが、これも最終的には学会では認められなかった。この過程で、「帝国大学新聞」の記事が不正確だということで、取材に来た文科系学生の誤解を訂正するというより激しく攻撃する一文を同紙の次週号に寄せているが、この問題について彼が神経過敏になっていたことが分かる。

レプラは病気そのものを克服しなくとも衛生状態を改善すれば事実上絶滅できることは欧米で実証されており、欧州に留学し、語学に長じて欧米論文を不自由なく読め、衛生学の鷗外と深く接触し、社会から医学問題を解決するという高橋その他の左傾学生達を善導してきた正雄が、もしレプラの克服そのものに関心があるなら、白金の研究所でなく、同じ医学部建物内の保健衛生学教室に接近し、共同研究する戦略もあったはずだが、日記、書簡にそのアイデアはない。それを考えなかったのは、同じ医学部内部でも教室が違えば外国であるという閉鎖的専門分化もあろうが、彼の社会嫌いから来る社会医学嫌いがあったと推測される。保健衛生学の中では社会医学というのが思想が生まれ、例えば

治安維持法に問われた安田徳太郎の社会進化論が昭和初期有名だった。安田は戦時中、尾崎ゾルゲ事件で有罪（執行猶予）となり、戦後、途上国医療援助でネパールに行き、正統言語学と異なる方法論を開発して、ネパールでも僻地の少数部族の言語であるレプチャ Lepcha 語（いま絶滅）を調べ、「日本語の起源」を書いて国語学界に衝撃を与えた戦闘的開拓者である。正雄はあくまで正統的西洋学風の立場に立ち、医学でも狭く深く専門化する立場で、社会医学に無関心だった。一般に正雄は社会に無関心で、同じ与謝野門下でも明治末から大正初期に社会文学というジャンルを開拓した弁護士平出修に無関心だった。正雄が平出について書いているのは、難病で死んだ彼につき文芸誌に医者立場から書いた一文だけで、平出の文学には無関心である。

戦争が激化し、軍医の需要が増すほか、本土空襲や陸上戦に備え、医師や医学知識の普及（とくに臨時看護婦としての女学生への訓練）が重要となり、理工系のほか、医大や医専が新設増設される。皮膚科も広義の外科であり、火傷や、不衛生な戦場における皮膚病など「軍需」が増えるが、正雄は逆に文芸に重点を移す。「戦局重大化」で「学徒戦時動員体制確立要綱」（学徒動員）が決定（6月25日）された昭和18（1948）年夏（実際の動員は秋）、正雄は文芸誌の座談会で定年（昭和21年3月）後は文学に復帰する意思を述べている。紙不足の中、病院に特配される紙を使って絵を描き（百花譜）、また親しいというより弟子と言える「文芸」記者野田宇太郎が編集長になると毎号文芸論を寄せ、また鷗外邸（いま鉄筋コンクリの国家公務員宿泊施設兼料理屋）が山の手大空襲で消失したことを残念がり復讐を誓う一文を「文芸」に寄せるなど、文筆活動に注力する。戦時下でも美食にこだわっている。近衛内閣の新生活運動や外米への苦情が日記に激しい語調で何度も記され、まだ蕎麦は統制されていなかったころ、大学山上会館の教官食堂の昼食を一口食べてやめ、蕎麦屋で食べ直している。人前でも平気で新生活運動の国策を破っているが、政府の戦争遂行政策に協力こそすれ反対はしていない。国家や組織より個人のホンネを重視するのがユマニテの一つの意味だから、やはりユマニテというレッテルは適切なの

かも知れない。日記には何処で何を（闇で）食べたか頻繁に記されている。東大教授だから皇族や華族から名指しされると喜んで湘南の疎開先まで何度も往診し、牛肉その他の馳走を受けたことが日記に何度も記されている。東大に近い江東地区の空襲（死者十萬）や山の手空襲で何萬の火傷患者が出ているが、それについての記述は日記に全くなく、肉などにありついた話が空襲下の日記の主題となる。病院特配の患者用食用油を役得で入手して、どの野草は炒めるとうまいという「研究」をしている。医者だが栄養の話は日記になく、専ら味の話である。日記には、定年後の文学作品のための材料と思われる話が多く記され、戦局への不安やレプラ菌の話より多いくらいである。

昭和20（1945）年4月に胃の不調から癌の可能性に気づき、なぜか外科の大槻教授を訪れ、その後も何度か自宅に往診に来てもらう。日記に内科柿沼教授の悪口が書かれているが、それほど柿沼を嫌っていたのか不明である。粗食で痩せて体力が落ちたと日記に何度か記されている。6月に柿沼内科で「レ線検査」を受け、癌でないと言われ安心したと日記に書いているが、実家静養を薦められ（実は故郷に別れを告げさせるという柿沼の配慮か）帰省して温泉に浸かり、痩せたと嘆いている。皮膚癌の患者は扱っているが胃癌は分からなかったらしい。7月には入院する。副作用の強い抗癌剤がない時代だったためか、病床で友人の谷崎から贈呈された「細雪」（昭和18年3月に「中央公論」連載を禁止されているが、冒頭の部分はこのころ出版されている）を読むなど、最初は元気である。放蕩作家で耽美主義の谷崎の文学は杳太郎詩と完全に通じており、定年を9ヶ月後に控え、特別の意図で読んだと解釈される。しかし7月末には体力が落ち、日記は野田による口述筆記となり、それも8月上旬で終わるから、敗戦についての感慨は分からない。10月柿沼内科で死んだ。自宅は大学に近い西片町だが、通夜は野田一人だったという。師弟関係が重要な医学部で、学生や医局員が焼香しただけで帰ったのは、正雄が文芸活動に熱中し、医学上の指導をしなかったからと推測される。

5 地方政治行政と地域文化における杢太郎研究の方法論

彼の郷里は東京から当時の汽車で3時間。切符の入手が困難な時代だが、実家は駅に近く駅関係者と親しかったはずで、長兄は町長だから駅長から切符を入手できたはずだが、家族親戚が通夜にいなかった理由は不明である。郷里を無視してきた杢太郎〔江藤1996〕に郷里は冷たかったのだろうか。

死後の杢太郎研究の中心になったのは、野田と慶太郎である。長兄は政治からは追放されても地元での影響力を保持していたが、その長男慶太郎は逆に治安維持法で逮捕された経歴が勲章となった。とくに築地小劇場や前進座で活動の経歴があり、もと築地小劇場女優でプロレタリア芸術団体に勤務していた美人妻の協力もあり、市議から県議として活躍し、当時のヒーロー徳田球一を伊東に招いて演説させたり、共産党トップトリオに次ぐ地位の神山茂夫の発疹チフス後の静養先を世話する（神山の有名な「天皇制の諸問題」は昭和16年の初稿を基に伊東で完成）など、戦後改革の地域トップリーダーとなり、得意の演劇の知識を利用して杢太郎の戯曲その他の解釈を始め、当時は大田家だけが保有していた資料を用いて、杢太郎研究をリードした。その後の研究は野田と慶太郎がの確立した骨格に肉付けすることに終始した。邦楽など伝統芸能の雰囲気満ちた戯曲「和泉屋染物店」の社会主義的解釈など、作品群から無理な解釈も、全集が出た後も多くの研究書や百科事典に定説として記述され、ノンポリ耽美派文学者や実証を重んずるはずの大学の研究者もこれに反論していない。弟哲二も共産党市議となり、伊東の文化活動に決定的影響を与えた。慶太郎の影響力の強さは、社共が上り坂の昭和33（1958）年とはいえ、共産系候補を伊東市長に当選させたことで分かる。沼田元弼市長は地元最大の本や文具を中心とする地域百貨店（相模屋百貨店）の出身で、インテリであった。大学はもちろん旧制中学さえなかった保守的温泉町で（伊東高校は旧女学校）左翼インテリを市長に当選させた政治力、文化力は驚嘆に値する。県議選で伊東は「小選挙区」で定員1だが、その椅子を共産党であるにもかかわらず慶太郎が得ている。その基盤となったのは、皮肉にも吉田内閣が観光以外には外貨を稼げなか

った朝鮮戦争前の不況期に立案内定した（正式指定は戦争勃発の1週間後）、国による国際観光温泉文化都市の指定（熱海、別府、伊東の3市）であった。これに共産党は反対したが、観光文化都市にふさわしい地元出身文化人の杵太郎を顕彰する活動が、後の自由党市長賢治郎と共産党市議（のち県議）慶太郎および市議哲二により推進され（すでに杵太郎会は1948年に結成）、長兄賢治郎が継いだ杵太郎生家が市に寄付されて杵太郎記念館となり（1969年）、資料が集められて杵太郎研究の拠点になり、杵太郎作の戯曲が1950年以来数度にわたり地元で上演されたりしている。

杵太郎の死が出版事情の悪い終戦直後であり、いわゆる戦後文学と異質で売れ行きが心配されたため、作品集はもちろん、単品も「日本医学史概要」を除けば、戦後の出版は岩波文庫の「木下杵太郎詩集」くらいだったため、地元を除けば、愛好者が野田や太田一族から聞いて解説する程度の研究があるだけだった。医学とは異なる形で、しかもより強い精神で、文芸研究にも師弟関係がある。元来は聖書研究や論語研究のように、一生をこれに捧げた弟子や継承者が著者や創始者への絶対帰依の念を持って布教や普及の目的から文芸研究が始まった。師や祖への批判はどんな小さい部分についても一切許されなかった。宗教的帰依から解放されたはずの近代大学の文学部やジャーナリズムにおいても、昔から尊敬されている古典的作品や作者を批判することは、評者研究者の理解不足、資質的欠陥を表すものとして排斥され、なぜこれら作品や作者が尊敬されてきたかの分析だけを強いられた。例えば、聖書やホメロスの作と伝えられる詩について、19世紀末の世紀末自由主義的見地から、民話や民話のように不特定の複数者による共作との説が提出されたが、これら作品は偉大な著者によってのみ創造されたものであり、それが分からない研究者は研究者に値しないと非難され排斥された。今日でも、古典に関する「権威」ある研究書、論文、解説、訳者あとがきの多くに、そう書かれている。とくに欧米で聖書やホメロスと言えば今も絶対権威であり、平常は自由民主国でも戦争や冷戦やテロの危機時にはマッカーシズムやアラブ系市民やイスラム教徒への弾圧が行われ

るように（逆に自由民主国でない大日本帝国で緒戦の勝利時は、滞日の中立国
外交官特派員が驚く自由があった）、欧米ではいざとなれば聖書復古がされるこ
とは、自由主義国米国で妊娠中絶を巡って死者が出たことから知られる。米
国議会の演説で最も引用されるのは常に聖書で次がシェークスピア、3位以下
は日替わり年替わりで、この二つの権威が揺るげば米国が揺らぐのである。実
際、世紀末に提唱されたシェークスピア複数説は今日では軽蔑の対象である。
日本では天皇を除けば社会全体に及ぶ絶対権威はなく、与謝野鉄幹が「古今集
はつまらぬ歌集にて、紀貫之は下手な歌詠みにて候」と言っておいて尊敬さ
れる。万葉集が数世紀にわたり多様な歌人による歌集であるからといって、価
値が下がるとは思われないし、平家物語が多数の琵琶法師の共作であることが価
値を下げるとは思われない自由な伝統がある（最近、欧米の価値観の影響で、
平家物語単一作者説が強くなったが）。英独仏文学の教育を受けた文学研究者が、
自己の文学資質を証明するため、研究対象とする作家詩人の優れた面だけを扱
うのが文学研究方法論となった。白秋研究者が彼の女性問題（姦通罪で留置所
入りしている）を書いて遺族から訴えられたことがあるが、文学至上主義の観
点からは相手の女性を不幸に陥れても（離婚され遊廓で働き、性病と結核で死）、
それを肥料に文学（城ヶ島の詩）を生めば尊敬されるから、この研究者は白秋
の「良い」面を扱っただけである。谷崎についても同じである。工学や医学論
文ではハードでもソフト、システムでも、欠点、限界、問題点を書くことが要
求されるが、文学では、研究対象の作品や作者に関し、それは許されていない。

師弟関係は文壇だけでなく大学でも重要である。杳太郎全集や日記の編纂に
は、杳太郎の古い友人で同じ東大教授（倫理学）だった和辻哲郎のような大家
もいたが、同じ東大でも若い島田謹二教授（教養学部教養学科比較文学）がよ
り中心となった。島田は台北高校教授のとき、正雄が医療協力で仏印に行く途
中台北に寄ったとき、杳太郎の宿舎を訪れたことが杳太郎日記に出ている。島
田は杳太郎を敬愛し、日本文学の主流は漱石でなく、鴎外と杳太郎だと主張し
ている。しかし実際の作業はその弟子である新田義次が担当した。教養学科ド

イツの文化と社会コースを出た彼はフランス語も堪能だから、女性のことをドイツ語で書いた一高時代の日記、同じくフランス語で書いた愛知時代の日記を判読し、スペルをチェックする編纂の仕事に適していたが、ドイツを中心とする西欧文学を専門としたかった彼にとっては大変な負担であったと想像される。こうして新田は空太郎の裏まで見てしまった訳だが、師島田が敬愛する空太郎について批評をすることは控えなければならなかったのか、批評らしい評価を避けて解説か背景説明に徹している。批評 critic とは、生死の分かれ目を危篤 critical と言うように元来、弁別すること、例えば善悪を判断することであるが、批評家のような鋭い批評は避け、しかし学者らしい文献考証も全集編纂で終わってしまっ、解説と賛美に徹している。

地域発展のポテンシャルの振興のため、地域財政の厳しい時だからこそ、各地に博物館の類を建て、地域特有のいわゆる博物（動植物、鉱物）や歴史を展示する他に、地元出身の文化人科学技術者の業績を若い世代に伝えることが必要だが [Eto 2005B]、その業績を顕彰することだけが重視され、客観的な分析や評価を排除することが多い。研究は資料に基づいていなければならないが、資料を最も豊富に持っている地元の関係者や関係機関とギブ・アンド・テイクの関係で資料保有者にメリットが出るように配慮しなければならない。有料であれば金さえ払えばよいが、多くは無料だから別の形で報う必要が出てくる。歴史では維新や近代化を知る上で重要な西南戦争の性格について鋭い研究が出てこない。資料を持っている地元で西郷に不利な研究には協力が得られないからであると推測される。本研究のように、公刊された全集を資料とする場合はよいが、現在では文学研究でも自然科学のように、未発見の新資料を用いなければ評価されなくなった。これは、文芸評論家の多くが安定した大学語学教師となり、大学内で評価されるために新資料の発見に努める動向と関係する。中原中也や高村智恵子が入院していた千葉の精神病院で大学の文学研究者が新資料を発見したが、病院のように文学から独立な所から資料を入手する方法などが必要であろう。

このような事情もあってか、杢太郎に関する客観的研究は〔江藤1996〕が最初であった。しかし公表されなかったが、冷静に杢太郎を見、太田家を中心とする杢太郎研究を嫌悪していたと推測される文学者がいる。それは坂口安吾である。

安吾と杢太郎に文学的共通点はない。放蕩耽美文学の杢太郎は放蕩者の白秋、秀雄、勇、谷崎と親しかったが、正雄は生活においては医学者としての節制を守っていた。女性と言え、一高時代に汽車で乗り合わせた女性を観察し、他人に読まれぬようドイツ語で詳細に日記に書いているのと、帝大教授になってから赤坂の料亭に招かれることが何回もあり、侍った芸者の名前を日記に記している程度で、大体において石部金吉と言ってよい。安吾は女性に関する限りは、結婚前に美人作家矢田津世子とプラトニックラブをした程度で、梶三千代との結婚後は愛妻家だったが、小林秀雄、中原中也などとの接触が深く、睡眠剤覚醒剤中毒で東大精神科に入院している。安吾は議員の息子という点と麻薬中毒で入院したという点で無頼作家の太宰治に似ているが、貴族院議員を父に衆議院議員を兄に持つ太宰より、焼跡文学・闇市文学の石川淳と親しくしている。他に尾崎士郎、尾崎一雄、壇一雄と親しい。それほど「悪事」はないが、薬物中毒で入院という点で杢太郎と対照的であり、杢太郎の兄が市長であるという点で、政治家の息子である安吾と共通点がある程度である。安吾は杢太郎の生前から文学活動をしており、当時の仲間には仏文関係者が多かったが、フランス帰りでフランス文学を読んでいた杢太郎の日記に安吾の名前はない。安吾は退院後、伊東で数年間静養生活を送った。杢太郎の郷里である。両者の接点はこれだけである。病中の安吾が自ら伊東を選んだ訳ではない。伊東を選んだ理由とは直接は無関係だが、安吾の父は憲政会で若槻礼次郎（のち首相）と知っていた、若槻は戦時中引退して伊東の別荘に住み、戦後の追放生活もそこで送った。その近くに追放中の士郎が住み、その近くに安吾が来た。憲政会の反対党が原敬を総裁とする政友会だった。原は全国鉄道網構想で、自派議員の選挙区に鉄道を敷いて我田引鉄と呼ばれたが、正雄の次兄円三は鉄道院（原

内閣のとき鉄道省に昇格)の高級官僚で、原内閣のとき伊豆一周鉄道を政策に入れるのに成功した。ちょうど長兄賢治郎の県議選の時、我田引鉄と疑われてもしかたなかった。円三は原と同じ岩手出身の鉄道院総裁後藤新平が震災後の帝都復興院総裁になったとき、復興院に移ったが、憲政会加藤高明内閣のときに摘発された疑獄事件で自殺した。このとき起訴された十河(のち国鉄総裁)は円三の法事に少なくとも2回出席していることが杳太郎日記から分かる。杳太郎は十河の裁判についても日記に記し、その無罪判決を感慨なしに記している。多数の路線候補から伊東線敷設が具体化したのは、熱海に政友会高橋是清別荘(のち大蔵省保養所)の隣に別荘を持っていた犬養木堂の政友会内閣のときで、長兄賢治郎の力が大きかった。観光線である伊東線は日中戦開始で工事中止が検討されたが生き残った。時の第1党は憲政会を起源とする民政党だが、政友会との差は4議席であり、政友会の力だったかも知れない。伊東は川沿いの沖積平野で河口が中心地だった。古い東郷平八郎別荘も河口に近い。しかし駅は北端の田圃の中に作った。太田家の近くで、その所有地の価格は急騰し、賢治郎の政治活動も資金的に楽になった。伊東を本当に終点とするなら、熱海から近いということで合理的な位置だが、次兄円三の最初の計画は伊豆一周で、事実、いま私鉄だが下田に南下している(伊豆急行)。私鉄とはいえ国鉄扱いで、私鉄の列車が堂々東京駅に乗り入れた最初の例である(天城号、踊子号)。下田まで行く計画なら、駅を少し南寄りに作っておけば伊東全体によかったとの感もある。そうすれば駅が安吾宅からも近くなる。父の憲政会をとくに支持した訳ではないにしても、安吾が太田家の我田引鉄に反感を持ったかも知れない。彼が県議選で投票した民主党は、若槻内閣の幣原喜重郎が総裁を務めた進歩党の系列で、どちらかと言えば憲政会である。

安吾の伊東に関係する多くの評論に杳太郎の名はない。また何人かの医者にかかったが、杳太郎の従兄弟で仏印医療協力を共にし、京城帝大から引揚げて伊東で開業していた井原医院の名も出てこない。無視こそが接点である。安吾の退院を心配した友人達は尾崎一雄、壇などが東京から伊東に同行したが、

他に東大病院の医者が出た。精神科ではなく、柿沼内科の長畑医局長である。柿沼内科は医学部教授である正雄が死んだ所だから、文学好きなら杳太郎が伊東出身であることを知っていたはずである。他に文学好きな南雲医師も同行した。南雲は井伏鱒二「本日休診」の三雲医師のモデルであり、鱒二の知り合いである長畑と知り合いであった。長畑は安吾が鼻や皮膚で苦しんで、耳鼻科（なぜか正雄のいた皮膚科でない）を希望するのに敢えて東大精神科の千田医師に回した。後に精神科で快方に向かうと鼻や皮膚の症状も消えた。神因性のものであることを長畑は見抜いたのである。文学者だったが心理学と精神病（日記に2, 3回精神病そのものについては書いている）に無関心だった正雄は、留学時代のフランスですでに神因性の各種疾患が注目されているのに無関心だった。なお当時の東大精神科教授は内村佑之で、その父鑑三は、正雄卒業の次年度から一高校長になり一高教養主義を築いた新渡戸稲造と、札幌農学校以来の同志である。西洋文化を日本に導入したキリスト教の研究者だが、キリスト教の信仰には無関心の正雄は敬虔なキリスト者である稲造や鑑三に無関心だった。また学生時代に正雄が嫌った蜜カラ一高が新渡戸により一高教養主義に変わったことに教養豊か〔新田1993〕と言われる正雄が無関心だったとすれば、彼の社会観を知る上で興味深い。日露戦後、外国からの戦費借金（外債返済）に苦しみ、大逆事件（幸徳秋水事件）の社会主義大弾圧まで起しながら、荷風、白秋、勇、谷崎、杳太郎らの放蕩墮落文学が許されたのは、日露戦後、欧米（とくにロシアの同盟国フランスやドイツ）から軍国主義と批判され「文化国家」をスローガンにしなければならなかった外圧により、フランス風ドイツ風教養文化を容認、振興したことも一因であり、このことに杳太郎らは気がつかないほど、社会から離れ文学三昧に浸っていたのであろう。

伊東には戦争協力のため公職追放で文筆活動を禁止されていた尾崎士郎が川を挟んだ近所にて親しく交際した。士郎は伊東の文泉堂書店の主人と親しく、よく部屋に上がって話し込んでいたが、この店は杳太郎研究の拠点でもあった。歴史評論を多数書いている安吾はネタ探しに本屋とくに古本屋を廻り、慶太郎

の古書店にも行ったはずである。共産党の悪口や、伊東の選挙に関して評論を発表していた安吾は慶太郎について聞いたはずである。伊東で有力な太田家から有名文学者が出たことは、肝臓病その他でかかり付けの医者から聞いたはずである。文学趣味の「肝臓先生」こと佐藤医師のほか、伊東医師会長にもなった藤波医師との交際が安吾の文章に頻出しているから、聞いていないはずはない。

昭和26（1951）年初夏の統一地方選挙において、伊東で県議選があり、彼は吉田茂の率いる自由党の候補の悪口を「新潮」に書いており、それを落とすため野党国民民主党のインテリ候補に投票している。この県議選は直後の市長選の前哨戦で、自由党から杵太郎の兄太田賢治郎が出馬することを安吾は知っていたと思われる。太田新市長が就任した数日後、安吾は伊東市営競輪に八百長があったと指摘、「新潮」に書いて、競輪主催者である市当局や、市財政や温泉客集めに利害を持つ地元有力者と対立関係になる。安吾によれば、暴力団が彼につきまとい、東京に行く汽車や山手線の電車の中でも尾行されたと言う。そのため彼は自宅に帰らず、旅館に隠れたり、練馬区石神井の壇宅に「亡命」する。競輪は、軍需産業を禁止された戦後、機械工業の生き残りのため機械産業振興協会がプロモートし、賭博ではあるが戦災を受けた都市の復興資金を集めるためという名目で戦災都市に競輪場を作った。それが一段落したところ、戦災を受けていない伊東（駅が機銃掃射されるなどで数名の死傷者）に作るというので、国際観光文化都市にふさわしくないと教育関係者や共産党が反対したが、朝鮮戦争前の不況時（戦争勃発の4ヶ月前、池田蔵相が中小企業の倒産やむなしと国会で述べている。なお後に池田通産相が似た発言をしたのは有名）だったためか実現したものである。安吾は競輪を愛好しただけに、この「八百長」に鋭く反発し、全国紙も安吾の抗議を大きく報道した。これが安吾と伊東市当局すなわち太田家との唯一の接点である。衆議院議員の息子として安吾は政治家を嫌っていて、政治発言は当時人気の共産党野坂参三への批判くらいである。それがなぜか伊東に関連することには反発している。その一つは水泳連

盟批判である。「泳ぐ度に世界新記録」という新聞報道の基は、実際水連がそう発表していることにあるが、「世界記録」の定義の問題で、少しおかしいことは小学生でも分かっていた。国際水連の公認記録は泳ぐ度に破っていたが、古橋自身の最高記録は毎度破られていた訳ではない。しかし敗戦後のうちひしがれていた国民を勇気づけた一介の学生古橋を褒め称えることに異議を挟む人はいなかった。安吾は分かり切ったことを敢えて批判したのであるが、実は伊東は水泳日本の中心地だった。太田家と親戚の井原家が戦前の幻の東京五輪（1940年の開催が決定されていた）に備えて温泉プールを開設し、地元から多数の水泳選手を輩出していた。安吾は伊東水泳の勝利に沸く伊東における井原の名声を批判したとも推測できる。なお井原の息子一夫も水泳選手で後に県会議長になっている。

伊東というより形式的には熱海だが、競輪事件の数カ月前、税務署事件がある。伊東は熱海税務署管内で、熱海には文士、芸術家が多く、当時、志賀直哉、谷崎、横山大観らがいた。彼らの扱いに慣れているはずの熱海税務署が、ある日突然（と安吾は認識）彼の留守中に来て、執筆活動や日常の食事に必要な品々（本、時計、電気スタンド、ラジオ2台、箏笛、茶箏笛、食卓を含め卓5、鉄瓶、火鉢2など。なお当時はガスが不自由で七輪や火鉢は夏でも使用）を差し押さえた。徴税が本来の目的なら経済活動（すなわち執筆）を阻害するのは矛盾であり、刑罰の場合でも建前上は食は保証する（戦争末期の食料難のとき、治安維持法にかかわる事情聴取で拘束するとき、警察は食事を出している）のだから、これらの差押は不当だが、その旨の教示を妻にしていない。その後も署員は税法に無知な安吾に、法で明示的に定められた教示を除き、適切な教示をしていない。こうして無知な素人である安吾を罠に追い込む手法を採ったと思われる。スポーツ界ではボクサーが素人を殴った場合は除名だが、税務では常套手段で、嘘でない嘘として、ある情報を隠すことは官房長官（のち法務大臣）の命令で大蔵省もやっている。徴税というより「懲」税で、法によらない懲罰だった。彼の抗議もあり、本人不在中という理由で妻が差押調書に捺印を

拒否したため、税吏が数日後来たが、そのとき「文士というヤツは」という敵意ある差別的発言をした。税吏が安吾の執筆活動や日常生活に反発していたものと思われる。実際、差押のとき不在だったのは飲んで旅館に寝ていたからである。税務署は予め内偵してから差押に来たと思われるが、内偵の方法は伊東の人々（とくに同じ公務員同士の市役所員など）から非公式に情報を集め、伊東における安吾の不評を聞いていたと思われる。なお市役所には太田郎の長兄はじめ太田家の知合いが多かった。

安吾は覚醒剤中毒だったが、覚醒剤は戦時中、夜戦の眠気覚ましや特攻隊員の出撃飛行の勇気づけに用いられていたもので、必ずしも「悪」というイメージはなく、締切に追われる流行作家としては煙草やコーヒーと同じという感覚だった。しかし税吏は彼を精神病院から退院した麻薬中毒患者の悪者と見ていたと思われる。また小林秀雄その他文学者達が来て徹夜で飲んでいるのを近隣が眉を顰めているのを聞き出したと思われる。さらに彼の作品内容も悪と判断し、その執筆活動を妨害することを憚らなかった、あるいは目的とさえしていたと推測される。悪による稼ぎだから徴税と二重の意味で「懲」税で創作手段である本を差し押さえ、さらには没収に値すると思っていたのであろう。敵意ある差別的発言は納税者を威嚇し、抵抗の意志を殺ぎ、従順化させる目的で税務署が使う手法である。イラクにおける捕虜収容所でも、威嚇やプライドを傷つける扱いにより、捕虜から情報を集める技法を米軍も使っている。警察も使うが、警察に関しては世論や弁護人の監視があるのに対し、1件1件は些細である税務にはマスコミは動かないし、税理士（当時は計理士）は弁護士と違って税務執行時の越権不法不当行為を追求しない。刑事裁判で拷問脅迫、長期拘留、電話盗聴など不法不当に集めた証拠は使えないが、税務では使えるから、どんな方法を使っても徴税に成功すれば勤務評定が向上する。税の不服審判は国税庁長官に従属する下級機関だから、行政から独立した裁判所と違い、税務執行における不法不当は扱わない。「判決」には長官の承認が必要である。司法に持ち込んでも、不服審判で長時間（例えば3年）をかけた後だから、裁判時には

「記憶にございません」とか担当者退職（実は関係部門に出向または天下り）で通用する。裁判官は刑法民法の類には学生時代から関心があるが、税法には無関心で、税務裁判では税務当局から出向している調査官に実際は一任するのが普通である。安吾の件でも、税務署は安心して恫喝的手法を採用したものと推測される。計画的に採用したか日頃の習慣で無意識的に行動に出たかは不明だが、安吾をして、文壇のために闘う覚悟を持たせ、また文芸雑誌をして安吾を支援させた一言であった。この時のやりとりは居合わせた記者が筆記しており、この言葉も第三者の証言として信頼できる。なお、二人来た税務署員の若い方が発言したのだが、若造だからということで、税務当局も謝罪はせず、大人である安吾も蜥蜴の尻尾と徹底的に闘うことはしなかった。

もともとは問題はシャープ税制改革に伴う納税側と徴税側の混乱と、医療介護費や執筆必要経費の解釈だったと言える。封鎖預金（銀行を救うため預金引出を制限し、給料も500円だけ現金で後は強制預金。500円生活と呼ばれた）時代に現金で稿料が入る彼の許に友人から借金の申込が殺到し、「市井の徳義」で貸してインフレのため目減りして事実上の貸倒れになったが、このような「市井の徳義」を税務署は認めなかった。収入は他人に渡し、彼自身は傘も買えず雨の日は仕事も断る状況だった。入院費が払えず東大病院を強引に退院して伊東に転地するとき、昏睡状態の彼に医師2名と友人数名の「介護者」がついてきたが、その費用も税務署は認めなかった。また作家としては普通の飲み代、交際費、さらに睡眠剤アドルムの費用を税務署は認めなかった。また医療費などの領収書は保存していなく、作家仲間との飲食接待は闇米、闇酒で領収書はなかった。太宰治の「斜陽」が文壇で注目された翌年の1948年に太宰心中事件があり、太宰の名と作品の流行は社会現象となったが、翌1949年のシャープ勧告で倒産相次ぐ中で「社用」が流行語となり、遊興費で「節税」するのが大手を振って認められ、大蔵省主税局や国税庁幹部が、これを「未亡人サロン」で働く戦争未亡人の救済だと新聞記者に答えた時代である。安吾も同様に考えたと思われるが、社用族と違い領収書を揃えていなかった。そのため税務署か

から見れば、数年分の滞納となったが、彼は自分の「市井の徳義の論理」が通用し、すでに1月に文芸春秋新社や講談社の印税を差し押さえてあるから、これで税務署も納得したはずだと思っていた時の差押だったようだ。彼の有名な「負ケラレマセン勝ツマデハ」は「市井の論理」で一貫しているが、税務署の論理には適合しなかった。結局、ことは東京国税局まで行き、雑誌社が東京駅に車を待たせ東京国税局まで乗せ、彼が国税局で担当者に居留守を使われ、各部署をたらい回しにされたりして2時間半を費やす間、車に記者3人が待っているなどの雑誌社の応援にもかかわらず安吾は敗北するが、問題は税法上の論理だけでなく、「先入主に惑わされて」彼に対する国税当局の偏見があったと彼は認識していた。文士の徴税に慣れているはずの熱海税務署が彼に対して強い行動に出た裏には、彼に対する伊東の偏見があると感じていたかも知れない。熱海に住んでいた谷崎は、すでに文豪扱いされて税務署も丁重に扱っていたが、若い時は女性を決定的な不幸に陥れるなどの谷崎に比べ、安吾から見れば自分が悪者扱いされるのに不公平を感じていたとしても当然である。その谷崎などと親しかった杢太郎が伊東で神格化され、女性問題など起こしていない自分が悪者にされる差別に怒っていたとしても不思議でない。伊東だけでなく東京国税局でも、一回りも年下の主任から、君呼ばわりを繰り返されるなどの侮辱作戦を受けている。安吾はキリシタン研究でも長崎に行って図書館で資料を探すなど実証研究をしており、宗教研究でも梵語（印欧語）やパーリ語（印欧語でない）を学ぶなど研究者的態度をとっているが、税務当局は精神病院退院の無頼作家としか見ていなかったのも、谷崎や杢太郎に比べて不公平な差別が生じたのであろう。

税務署への不服が競輪への不服を惹起したことは、時間的に連続していることから確かと思われるが、その基礎には伊東への不服があったと考えるのは不自然ではない。少なくとも伊東の側が安吾を快く思っていないことは確かであり、その一因が太田家により神格化された杢太郎に対する無頼な安吾という比較にあったことも確かである。安吾の側でも、政治家嫌いの彼が政治を家業と

する太田家を快く思っていたはずはない。

差押の数週間後、近所で殺人事件が起きた。追放で伊東に住んでいた戦前の財界人が、追放解除の内定があり、あと数日で公式に解除というとき殺された。被害者の近所で交際もあったと推測される尾崎士郎が朝日新聞支局員から電話で聞き、当時推理小説を多数発表していた安吾に知らせたもので、彼らはともに現場に行き、その後も取材を続けた。「孤立殺人事件」という安吾の随筆のタイトルが示すように外部から侵入した形跡がなく、すぐ犯人の目星はついたが警察はなかなか逮捕しなかった。とくに負傷して入院中の「犯人」（のち自白、父母殺しで有罪判決）を、法的には単なる重要参考人だからか、看護婦1人の監視にとどめた。この慎重さと人権尊重につき彼は民主警察と感心しているが、裏を返せば、伊東市警察（昭和29年以前は県警でなく市警）でさえ人権尊重なのに、熱海税務署や東京国税局が薄弱な根拠で強引で横暴な態度をとったことへの悪口とも解され、この殺人事件が税務署に対する彼の反発を強めたと推測される。

この朝日新聞伊東支局員は、市長立候補予定者が杢太郎の兄であることを知っていたはずである。安吾が書いているように、事件の発見者は被害者の隣に住む桃井元海軍軍医総監で、安吾は取材で会ったかも知れない。正雄は東大医学部教授として海軍軍医学校の卒業式に招かれたりしており、桃井は伊東転居以前から正雄のことを知っていた可能性があり、元中將ということで伊東の有力者と交わっていたから、太田兄弟についても知っていたはずである。なお追放された桃井が税務署に秘密で診療活動をしていた脱税行為も安吾は取材の過程で知るか士郎から聞いたはずであり、ここでも元中將との不公平を感じと推測される。無頼と異なる医療であり、桃井の患者には近所の星野直樹元東条内閣書記官長（巢鴨服役中）や若槻元総理の家族がいたから、税務署が桃井を不問にしたのは不思議でない。

安吾の当時の番地は分かるが、現地に碑の類はなく、現在その場所を正確に特定するのは単なる文学ファンには困難である。伊東図書館を見ても杢太郎に

関しては地元研究者による本はあるが、安吾についての本はほとんどない。全国的知名度からは安吾の方が杳太郎より高いが、安吾の研究者は伊東にいないと推測される。観光文化都市だからか伊東には歌碑や句碑が多いが、数度伊東に来遊した程度の歌人俳人文士の、伊東とは無関係の作品が碑になっている。尾上柴舟は伊豆を愛したが伊東で詠んだ訳ではない彼の代表作が、それらしい風景の場所に建てられた碑に刻まれ、多くの観光客に誤解を与えている。それに対し安吾の碑はどこにもない。市役所の案内係は安吾の名も知らない。

地域経済の発展の基礎は教育で、広義の教育と言える地域文化を発展させることが重要と主張されているが [Bayraktorogu & Kutanis, Eto 2005A]、伊東の場合はそれが超党派とはいえ、特定有力家系とその周辺の視点からのみされてきたと言える。杳太郎生家の寄付など太田一族が果たした役割は高く評価されるが、その視点が全体を支配してしまったと言える。

全く違う問題だが、文学関係者による研究が文学に偏るのは当然として、地元での研究も完全に文学に偏っているのは見逃せない。しかも、医学は低俗で詩と美術こそが価値があるという観点からのみなされている [新田1990, 新田1993]。これは杳太郎研究に地元医師会その他医師が参加していないことに関係している。同じく、キリシタン研究者でもある彼に地元キリスト教関係者や歴史教員が無関心であるのも見逃せない。もちろん現在の（あるいは実は当時でさえ）彼のキリシタン研究に価値があったか、有名詩人で帝大教授の本だから出版社がついただけかという価値判断もあるが、もしそうなら、それだからこそ宗教史に関連する地元専門家の参加があってもよいはずである。杳太郎の絵が新田など一部文学者や伊東地元研究者に絶賛されているが、これについて専門美術家の参加はない。疎開で伊東にいたとき伊東高校の教師をしていた故斉藤真一画伯や、世界的版画家で直木賞作家でもある故池田満寿夫その他、伊東にアトリエや別荘を持つ美術家は多く、郊外の20世紀美術館に学芸員もいるが、彼らが杳太郎会の研究会に招かれたとは聞かない。伊東に客観的研究をする風土がないわけではない。三島生まれではあるが、伊東観光協会元専務理事で木

下杵太郎記念館運営委員でもあった牧野正氏は海軍で鍛えた英語力を利用して、伊東で洋式船を造った三浦按針の実証的研究者である〔牧野1979, Makino 1981〕。医学その他で多面的に活躍したと称賛しながら、実際には正雄を、ただ文学の視点から狭く扱うのは、人文学の方法論的普遍性を追求する筆者の問題意識からは首肯できない。

6 結言

科学技術と人文科学の方法論的交流の可能性を探る目的で、医学研究と人文学研究で活躍した太田正雄（木下杵太郎）を事例にとりあげた。同一人物が同時並行で両分野を研究した訳だが、もともと両分野を統合しようという長期計画を持っていた訳でなく、また理屈っぽいことは嫌いと自称しているように、抽象的一般的な方法論的思索に彼は全く無関心だった。短編詩や臨床や実験による実証的医学研究論文に示されるように、長編の体系的著作や一貫した思想で連結する論文はない。晩年の一見一貫したレプラ菌培養研究は古典的なコッホ4原則による実験で彼自身の独自の方法は見出せない。留学中の白癬菌分類は、分類体系の思想なしに行われた。学生時代的美術史書の翻訳と同じく、仙台時代のキリシタン史研究も、堪能な語学力を活かした自称史実主義によるもので、津田史学方法論が確立された後では、評価し難い研究である。大同石仏の研究は下町風俗「浮世絵」で有名な木村莊八画伯との共同作業であり、実際に現地で（一部破壊までして）実物に触れた調査に基づくもので、貴重な調査であるが、調査についても分析についても、方法論的工夫はない。物理学者の武谷の方法論的反省に基づく、素粒子、科学史、技術論の研究〔武谷他〕に比べて、一見物足りない感を否めない。

しかし、500年の歴史の物理学や、200年余の歴史の経済学や、学として認められてから200年弱の技術に比べ、はるかに長い歴史がある医学や人文学においては、ひたすら実証に励むことこそが最高の智慧であるとの教訓が蓄積されているとも言える。それが長い歴史の重みと考えられる。鷗外の歴史小説は単な

る考証だとの意見も強いが、清朝や江戸時代の考証的実証主義の学風に束縛されていた面の他に、津和野藩典医の伝統に育った鵬外は、新しい観測実験器具による実証の物理学の実証主義に対し、歴史の重みのある実証主義こそ医学と人文学に共通の方法論だと思ったのかも知れない。都合により必要だから小出しに細切れ知識を動員するという発想は、人文学に無縁なのかも知れない。

7 おわりに。謝辞その他

本論文は全面的に方法論の観点から扱っているが、以前の〔江藤1996〕は、医学の実証的方法論には直接言及せず、学問観から扱ったもので、縁あって地元の「伊豆新聞」に連載された。正雄の西洋医学一辺倒の方法論と、文学、宗教史、美術における西洋への関心の深さを考察して、脱亜入欧の姿勢と評価したものであった。下町趣味も世紀末フランスにおけるジャポニズムとの観点で扱い、故郷地域への無関心を指摘したものだったが、これが地元 zu 大きな衝撃を与えてしまった。地元教育界では〔奎太郎会1995〕の副題「郷土から世界人へ」に示されるように、奎太郎を模範としてきたので、それが故郷と祖国に無関心な脱亜入欧思想の持ち主では、戦後教科書を墨で塗りつぶすことや二宮尊徳の像と英霊勇士の忠魂碑を倒すことが命令された時のような混乱を与えてしまったのである。本論文の資料の調査において、筆者が保養のため伊東を訪れ奎太郎記念館に寄って、当時常任理事だった故哲二氏からお話を伺ったことが重要な意味を持っている。筆者の問題意識は氏の全く望まない方向であったにもかかわらず、氏は〔奎太郎会1995〕を贈呈して下さった。80歳代後半だが頭が鮮明で記憶力が正確で頭の回転が早かった氏は直後亡くなられた。ここに深く感謝し、また深く哀悼の意を表する。奎太郎脱亜入欧説〔江藤1996〕を掲載したことで伊豆新聞には郷里の抗議が殺到し、大変な御迷惑をおかけした。ここに深くお詫びする。しかし奎太郎会長杉本八百蔵氏の教育者らしいお人柄のため幸い一応は円満に解決した。それには仲介に入った奎太郎会員でもあった故鈴木藤一郎当時市長の温厚な御性格によることが多い。深く感謝し、深い哀

悼の意を表する。杉本氏の御教唆で、杳太郎会の目的は杳太郎の研究でなく顕彰であることを知ったが、それを知らずに杳太郎会に御迷惑をおかけしたことをお詫びする。筆者が諸学の常道に従って批評を展開してしまい、東大教授が再三にわたり学問の良心を曲げて一方的な杳太郎礼賛論を展開し地元研究者を指導し、東大教養学部紀要や同学部を拠点とする学術雑誌であるはずの「比較文学」にさえ非学問的研究を掲載し続けた活動の成果に損害を与える結果となった。正雄と同じく東北大および東大医学部で教授を務め、鷗外と同じく衛生学を専門とする鈴木継美東大名誉教授と森鷗外顕彰会長中井義幸東京芸術大学名誉教授からは、筆者が大学入学時からの縁を利用していろいろ御教示願った。杳太郎戯曲の上演の御経験豊かな竹下泉氏は、戯曲を読んだだけの筆者に重要な示唆を下さった。太田家と親戚である帝都高速交通営団（いま東京メトロ）理事故井原平氏からも情報を戴いた。故坂口安吾氏の御長男綱男氏からは税務関係の未公刊資料を戴いた。東大医学部出身の文学評論家加藤周一医博には学生時代に医と文の関係につき刺激を受けた。これら諸氏に厚く御礼申し上げる。

残された問題としては、方法論の観点からは、「昭和の鷗外」というより、上述のように「日本のゲーテ」というテーマの方が重要と思われる。実際問題としては、正雄は昭和の鷗外と呼ばれたが、日本のゲーテとは呼ばれなかったし、日記や書簡にもその語は出ていない。しかし方法論的には鷗外よりゲーテの方が科学者としても文学者としても深い意味がある。

さらに「日本のポール・バレリー」の視点の方が方法論的には興味がある。正雄とほぼ同時期に活躍し、ほぼ同時に死んだバレリー（Paul Valéry）は、相対論のアインシュタインや非ユークリッド幾何学のリーマンらと深い交遊を持ち、日記から推測すると、それらの方法論を文学に導入しようとしていた[Tabary]。またバレリーは記号論者でもあった。

バレリーは20世紀象徴主義 *symbolisme* の代表と見られているが、杳太郎と活動期がほぼ一致している。象徴派は心情吐露や告白を避け、音や香で心を象徴的に表現する。これは杳太郎の詩そのものである。初期の詩が外光派印象派

の影響で色を主軸としていることは本人も述べており、全盛期の詩が風鈴、縦笛、堅笛、三味線、義太夫節、香、匂ひなどの語で満ちていることも文学者に知られているが、この詩風と象徴主義の関係は無視されてきた。文芸研究は文「学」研究でなく作「家」研究であり、家元師弟、仲間関係、結社を重視する方法論を採用するから、象徴主義者と人的関係を持たなかった杳太郎を象徴主義と無縁と頭から前提してきたのであろう。日本における象徴詩の代表は上田敏で、杳太郎は敏と同じ「パンの会」におり、敏の留学送別会にも出ているが、敏について日記でさ言及していない。後に芥川が非難したように南蛮語の意味を知らずに音だけに注目して非学問的に散らばせた詩を作っていた杳太郎は、東京高等師範教授（のち東大講師、京大教授）だった学者の敏を避けていたと解釈でき〔江藤1996〕、文学研究者もそれに追従したのであろう。敏は「耶穌」を発表するなどキリシタンにも詳しくあったから、杳太郎にとっては煙たい存在だったと想像される。なお敏の訳詩集は「海潮音」と題されているように音が重要である。敏は正雄よりはるかに多い頻度で鷗外日記に現われる。正雄は昭和期に鷗外について何度も書き、自他共に昭和の鷗外となったが、死んだ鷗外から見れば少し意外かと思われる。正雄が鷗外に言及するようになったのは、帝大医学部教授が文学に精力を費やしていることに周囲が冷たい目を向けていることへの弁解だったとも考えられる〔江藤1996〕。

正雄の留学時代、言語学者ソシュール F. de Saussure その他の記号主義 *symbolisme* または記号論 *semiotics* は文学界でも有名で、学生時代に杳太郎が没頭した印象派絵画と同じ世紀末に活躍したボードレー C-P. Baudelaire やマラルメ S. Mallarmé の詩がフランスでも日本でも注目されていた。これらのことは、もちろん杳太郎も知っていた。杳太郎の最初の自編詩集「食後の唄」はマラルメの「半獣神の午後」 *L'Après Midi d'un Faune* に因んだ題名と推定される。当時、科学哲学から出発して諸学百般を体系化することを計画実行していた田辺元もバレリーの他に、マラルメの象徴詩を研究している。ソシュール言語・文化哲学の方法論である記号論 *symbolism* への関心であろう。

記号論の開祖は医学哲学者ヒッポクラテスと言われるほど医学は兆候 sign の学であるが (sign と symbol は記号論でほとんど同義)、一般的抽象的思想を好まない医学者正雄は、論文でも日記でも記号論に全く無関心だった。内科や精神科は兆候の学だが、直接見え触れる皮膚病では兆候という概念は不要であり、フランスで顕微鏡を介してではあるが、菌を見る作業に従事していたから、記号論的方法論とは無関係だった。また留学当時ヨーロッパで注目されていた神経性皮膚炎 (皮膚面での兆候から精神面を分析) にも終生無関心だった。東北大や東大で、皮膚結核、皮膚癌、レプラなど、初期に兆候を見て早期治療をすることが決定的に重要である疾患に取り組むことになっても、記号論とか早期発見という語は講義、日記、書簡にない。レプラ菌については論文、講義、日記で詳しく触れているが、記号論的兆候論的発想は全くない。なお晩年、胃癌の兆候の発見が遅れ、気がついてから半年で死亡している。

同じく方法論の観点から残された問題は、李太郎における絵画と人文学の関係がある。文と画の関係は中国絵画の余白部分に一見落書のように書き込まれた讀や詩のように、また王維 (摩詰) や与謝蕪村 (謝春星または謝寅) が詩人にして画家であったように、詩画の精神的境地の一体性は珍しくない。李太郎の友人でもある高村光太郎も詩と彫刻を一体化させた。また写生を好んだ正岡子規が、言葉の技巧を排して写生文を尊んだように、方法論的な一体化も少なくない。李太郎の場合は、初期の詩における光や色の扱いは意図的に絵画論から採ったものだが、仙台時代の宗教史のような人文「学」研究における訓詁的な文献史実主義が晩期の写生画「百花譜」に見られる。百花の写生画を優れた美術作品と見る李太郎文学讃美派の評価は根拠を欠くが、彼自身学生時代に支持した印象派や反対の表現主義など美術専門家の流れから離れ、絵画の原点である写実に戻った事実は、彼の本性が医学などではなく美術であるとの説 [新田1993] に対し、医学や文献学など実証性にあるとの観点を示すもの [江藤1996] と考えられる。医学者である茂吉も短歌写生説を唱えている。研究対象の作家をひたすら讃美することが要求される文芸界の作家論の束縛から李太郎

研究を解放すれば、学問芸術全体に有益な情報を得ることができると期待される。せっかく東大教養学部比較文学 comparative literatureが大学における杳太郎研究の基地だったにもかかわらず、杳太郎を相対的 relative, comparativeに見ることを拒否し、絶対視する作家研究の方法論を採用してきたと言える。伊東には多くの美術家がアトリエや別荘を持っている。彼らは杳太郎の絵をただ絶賛する文学者の研究態度に呆れ、杳太郎研究から背を向けているが、詩と宗教と絵の関係を客観的に研究する態度をとれば彼らの参加も期待できる。

このように方法論の観点からは、文学以外の世界からの杳太郎研究が必要である。文学界は、文学を文学至上主義の観点からのみ研究することを要求し、したがって医学を低い分野とする必要がある [新田1993]。研究者の多い鵬外についてさえ、衛生学という部外者にも理解しやすく、論文数もきわめて少ないにもかかわらず、医学面の研究を全く行っていないくとも、文学面で精密に研究していれば文学界では認められるのは、鵬外研究者に対してさえ文医の両面を要求しない寛容さだけが理由ではない。医学のごとき低劣な面を鵬外から消去し、鵬外をひたすら文学の世界に昇華させるのが作家研究としての鵬外研究の神聖崇高な課題だからである。世間で鵬外や正雄が評価されるのは、文学以外でも活躍したからであるが、文学界では加藤周一医博などを除けば、彼らが多面的に活躍したことは単に有能であることの証拠に過ぎず、せっかくの持てる才能を浪費した残念な事柄と見るのである。

第1節で軽く言及した茂吉は、人麻呂研究で学士院賞受賞の第1級の文学研究者である他に、紀元2600年の国民意識高揚時代に万葉復活を担った国民思想家であり、臨床とはいえ長崎医専（のち長崎大医学部）教授を務めた医学研究者でもあった。紀元2600年記念事業として帝国学士院が大日本科学史の壮大な計画をたて、医学史を割り当てられた正雄が気が進まぬながら戦時中に執筆した西洋医学偏重の「日本医学史概要」に比べ、精神科医茂吉がどのような医学活動を行ったか、興味ある研究テーマである。茂吉に関しては本だけで百冊近く、論文は数百に上るが、医学との接点の研究は例外的である [加藤淑子]。正

雄は茂吉と著書の交換その他の交流が深くあったことが日記にあるが、茂吉の医学内容に関する特別のコメントがないことが、かえって関心を惹く。なお茂吉の愛人（歌人）は晩年伊東で暮らし、そこで没した。伊東を最後の地選んだ理由は不明である。

文学者による鷗外論の大本営発表を除けば、鷗外の医学業績は後世に遺産とされていないように、文学者による菌の浮く李太郎論を除けば、正雄の場合も太田母斑というあいまいな診断名を遺した他は、医文のいずれでも後世の遺産にならなかった。しかし第1節に述べたように、理工医系と人文系の両面で学術研究をした例外的努力は、統合に不成功だったとしても、後世の遺産と見てよい。この遺産を継承、発展させるのことは、学際研究の方法論を探求する上で重要である。本論文はそれに僅かでも貢献できたなら幸甚である。

8 参考文献

芥川竜之介全集、岩波書店。

浅野一、サービス工学とロボティクス、文部科学省科学技術政策研究所、科学技術動向、第58号（2006年1月号）、p p 34-35、2006。

上田敏、定本上田敏全集、教育出版センター。

江藤肇、医学者李太郎の詩と史実主義ー故郷への愛憎、伊豆新聞、毎週日曜連載、1996-97。

H. Eto. Obstacles to emergence of high/new technology parks, ventures and clusters in Japan. Technological Forecasting and Social Change. Vol. 72, No. 3, pp. 359 - 373. 2005A.

H. Eto. Transfer of traditional techniques to emerging industry for regional development and scientific potential.. UInited Nations Asia Pacific Tech Monitor (Sept - Oct), 2005B.

奥和田久美、学際研究をどうすすめていくかー生活支援ロボティクスをめぐるヒトとロボティクスの関係、文部科学省科学技術政策研究所、科学技術動向、第58号（2006年1月号）、p 30、2006。

加藤周一著作集、平凡社。

加藤淑子、精神病学者茂吉 一主として滞欧期の業績とその歌について。平野仁啓・本林勝夫編、斉藤茂吉研究。pp. 333－349。右文書院（東京）。1980。

北原白秋、白秋全集、岩波書店。

木下杢太郎全集、岩波書店。

木下杢太郎日記、岩波書店。

木下杢太郎書簡集、岩波書店。

木下杢太郎画集、用美社。

木下杢太郎、百花譜、岩波書店。

木下杢太郎、新百花譜百選、岩波書店。

木下杢太郎宛知友書簡集、岩波書店。

坂口安吾評論全集、冬樹社。

杉山二郎、木下杢太郎－ユマニテの系譜－、平凡社、1974。

高橋実、鵑外の会のことなどー仙台時代の杢太郎。[新田1993] p p 16－36，杢太郎会（伊東）発行、1993。

武谷三男、久保享五、杉本栄一、高梁善哉、都留重人。自然科学と社会科学の現代的交流ー社会学者に対する現代物理学解説。理論社、1949。

田辺元、ヴァレリイの芸術哲学。筑摩書房。1951。

田辺元、マラルメ覚書。筑摩書房。1961。（季刊誌「声」、第8－10号連載、1960－61）。

谷崎潤一郎全集、中央公論社。

J-C., Tabary. Introduction a la methode de Paul Valéry. Revue Internationale de Systémique. vol. 8. pp. 287 - 306. 1994.

永井荷風、荷風全集、岩波書店。

夏目漱石全集、岩波書店。

新田義之、木下杢太郎、小沢書店、1982。

新田義之、杢太郎芸実における美意識と知性、杢太郎会（伊東）発行、1990。

新田義之、木下杢太郎と与謝野晶子、杢太郎会（伊東）発行、1993。

新田義之、木下杢太郎のユマニズム、[杢太郎会1995]、pp. 161－170。

野田宇太郎、木下杢太郎の生涯と芸術、平凡社、1980。

S. Bayraktoroglu and R.O. Kutanis, Transforming hotels into learning organisations: a new strategy for going glabal. Tourism Management, vol. 24 (No. 2), pp. 149 - 154, 2003.

牧野正、三浦按針の足跡、牧野（伊東）、1979。

T. Makino, Blue-eyed Samurai, 牧野（伊東）、1981。

増山元三郎、少数例の纏め方、東大医学部講義（昭和10年代ごろ）、のち岩波書店、1942。

奎太郎会編、木下奎太郎－郷土から世界人へ－。奎太郎会（伊東）発行、1995。

奎太郎記念館編、目で見える木下奎太郎の生涯、緑星社、1981。

森鷗外全集、岩波書店。

和辻哲郎全集、岩波書店。

2006. 3 .30

（えとう はじめ 本学教授：脱稿時）

平成18年 3 月31日定年退職

etohajime@peach.ocn.ne.jp